

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第二十九課 よく いらっしゃいました：
待遇表現 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002804

基礎篇第二十九課

よく いらっしゃいました

——待遇表現 1——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課およそ5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を昭和58年度までに完成した。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第二十九課「よく いらっしゃいました」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 窪田富男（企画協議会委員・東京外国語大学教授）

資料1., 2. 日向茂男, 清田潤（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和60年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・留意点	2
2.2. 内容・構成——場面を中心として	6
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	6
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての分類	6
(1) 人間関係	7
(2) 場面の構成	8
(3) 本書における敬語の分類	10
(4) 敬語の意味	13
2.2.3. 言語場面, 言語表現についての解説	14
3. この映画の学習項目の整理	53
3.1. 待遇表現と敬語	54
3.2. 敬語の形式	56
3.3. ダの体, デス・マスの体とその文法性	58
3.4. 敬意と敬語	61
4. 参考文献	63
資料1. 使用語彙一覧	69
資料2. シナリオ全文	95

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「よく いらっしゃいました」は、その第二十九課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の作成等に当たったものは、次のとおりである。

昭和58年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子	国際基督教大学講師
木村 宗男	日本語教育学会専務理事
工藤 浩	国立国語研究所言語体系研究部研究員
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター教授
佐久間勝彦	東京外国語大学講師
杉戸 清樹	国立国語研究所言語行動研究部研究員

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

南 不二男	日本語教育センター長
川瀬 生郎	日本語教育センター日本語教育指導普及部長
日向 茂男	日本語教育教材開発室長
清田 潤	技官
中道真木男	研究員

この映画「よく いらっしゃいました」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当し

た。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室が全体企画・編集を行い、執筆には窪田富男委員があたった。また資料1., 資料2. は、日向茂男、清田潤が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・留意点

この映画「よく いらっしゃいましたー待遇表現1ー」と、次の映画「せんせいを おたずねしますー待遇表現2ー」とは、日本語の待遇表現の基本を、敬語の用法を中心として、具体的人間関係や場面の中で、意識的に理解させることを目的としている。

＜意識的に＞というのは、学習者がすでに身につけてきた日本語も、この映画シリーズの28巻までに含まれている言語表現も、その大部分が待遇表現の中の一定のレベルに位置づけられるものであり、ただその位置づけを指導の中心（重点項目）として扱ったことはないという意味においてである。

現行の初級段階の教科書は、そのほとんどすべてが、「です／ます」レベルの文を教育の基本として提示している。このこと自体が、生きた日本語を学習する際の、つまり日本人とのコミュニケーションで、安全・有効な表現形式とは何かという問題から逃れられないことを示している。

同一の事実を伝えるのにも、相手が変われば、あるいは場面が変われば、話し手の選ぶ表現形式も変わるのが日本語の話しことばの自然である。しかし、その変容の姿は極めて複雑であるので、これを入門期の段階から導入することは、プラスよりもマイナスの面が大きいと判断されている。なぜなら、学習者はその初期においては、変容の種々相よりも、コミュニケーションとして最低限要求される言語手段の獲得に精一杯だからである。これが、多少の不自然さに目をつむり、安全性を優先させて、ある時期まで「です／ます」レベルの文で押し通している理由である。

とはいえ、28巻までの映画においても、学習にさしつかえないと判断される限りにおいて、特に21巻以降、「だ」レベルの文、つまりインフォーマルな表現もかなり採用されている。したがって「です／ます」レベルの文と「だ」レベルの文との差異について、その待遇的性格をある程度は知っているはずである。この映画はその＜ある程度＞の理解を前提としてよいだろう。（もし、よく分かっているというなら、「（先生が）おっしゃった（よ）」と「（先生が）おっしゃいました（よ）」の違いについて正しく理解しているか否か確認しなければならない。3.3.参照。）この映画はそのような文末の差異はある程度まで既知のこととして、その上に新しい敬語形式（尊敬語や謙譲語やその他）の意味・用法を導入、または復習することを目指している。新しい敬語形式といっても、「～を（～て）ください」という依頼の形はかなり早くから、また「くださる」「いただく」「あげる／さしあげる」等は「や

り・もらいの表現 1, 2」(26, 27巻)としてこの映画でも特別に採りあげられているから、全く初めてということにはならない。

にもかかわらず、さらに新しい敬語形式を導入することは、＜敬語＞が日本語の待遇表現の根幹をなすものであり、特に社会活動を営むく成人＞の言語生活には不可避なものと考えられているからである。日本人の言語行動が、上下、ウチ・ソト、あるいは親疎などの人間関係によって際立った特徴を見せることは事実であるから、学習者の日本語能力の向上とともに、日本人の人間関係とことばの使い分けを理解し、可能な限りその運用の能力をも習得させる義務が教師側にあると思う。日本人と全く同じということは困難であるが、徐々にそれに近づける努力を回避してはならないであろう。対人関係に応ずることばの使い分けには、日本人の人間の扱い方についての価値観がそのまま反映しているからである。その価値観は異文化言語を背景とする学習者には決して分かりやすいものではない。上下の概念にしても、ウチ・ソトの概念にしても、いずれか一方のみの理解では、学習者は母語文化に当てはめて解釈し、日本語に適用して失敗するケースが多々ある。たとえば、自分はもう先生とたいへん親しくなったからインフォーマルな表現でいいだろうと主観的に解釈しても、日本人の価値観はそう簡単には許さない。試行錯誤は運用能力を重んずる外国語学習にはつきものであり、寛大な態度をとるべきであるが、それが教師側の提示や説明や練習の不備にもっぱら起因しているとすれば——その判断は難しいが——教師の責任は重いというべきであろう。

この映画のサブタイトルは「待遇表現」であるが、新しい提示として扱ったとしても、復習として扱ったとしても、その多くが「敬語」であるという意味においては、サブタイトルも「敬語」であってもよい。しかし、敬語は敬語に非ざるものとの対立においてはじめて存在価値を有するものであるから、＜敬語＞と＜敬語に非ざるもの＞とがどのように使い分けられているかに留意させたいという主旨で「待遇表現」としたものである。ただし、敬語に非ざるもののうち、軽卑語等は全く扱われていない。

また、新しい敬語形式の導入といっても、それほど多種多様のものを提示しているわけではなく、日常生活でよく使われるものばかりである。また、敬語を含む文の構造も比較的簡単なものがほとんどで、単語の意味が分かれば文の意味も自ずと分かるようなものばかりであり、くわしい文法的説明を要求される文は極力避けられている。難しいのは——待遇表現という場合は、ほとんどいつもそうだが——セリフとして選ばれた文や文を構成する要素が、人間関係や場面からみて＜妥当＞であるか否かの判断である。この＜妥当性＞の判断は、その時代、その社会の常識に帰すべきものである。この常識はまた、個々人によって、大なり小なり異なるという宿命を持っている。教師側の自戒すべきことはこの点である。しかし、この映画に採られた言語表現は個人の創作によるものではなく、何人かのことばに関する専門家の合意の上に成り立っているということは覚えておいてよいことだろう。

したがって、待遇表現の基本の理解を目指しているこの映画でもデリケートな部分にこだわれば、いくらでも問題は出てくる。しかし、初級段階の教材として制作されている以上、細部にこだわることはかえって学習者を混乱させることになる。人間関係とことばの使い分けの基本を学習させることが目的であるから、学習者の納得する範囲で説明をとどめておくべきである。また、登場人物の動作・態度にしても違和感を覚える場合があるかもしれない。これについては、日本人の習慣として許容範囲であるかどうか、一般的であるかどうか、望ましい態度・物腰であるかどうかという観点から説明が加えられるべきものと考えられる。

ここで、再度強調しておきたいことがある。学習者はおそらく教科書でもある程度の敬語の用法は習っていることであろう。その場合、指導上の分かりやすさを考慮するあまり、＜上下関係＞のみで敬語の用法を説明し、それが学習者の固定観念となっていないかどうかということである。もし、そのような観念でこの映画を見れば、疑問が続出するであろう。そうなら、それを訂正するよい機会である。それだけでも、この映画の目的の大半は達せられたことになる。日本人がこの映画を見れば、言語表現や態度・しぐさの妥

当性にまず目が向くであろうし、外国人は敬語の使用範囲の広いことに驚きと疑問を持つだろう。

2.2. 内容・構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それをさらに短いシーンに分ける時には、Ⅰ—1、Ⅰ—2、Ⅰ—3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①、②、③……のように通し番号をつける。類似文や変形文を引用する時には、①'、②'、③'……のようにする。変形引用が二つ以上ある時には、'、''……の順で'を重ねていく。
3. この映画の中に現れていない文や語句を例示する時には、〔 〕付きの番号をつけ、それに関連した引用文や引用語句には、2.の場合と同様に'印をつける。一群の文や語句を例示する時にも、出現順に通し番号をつける。

本解説書での言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもみられるが、ここでは、積極的には、その問題に触れない。

なお、①、②、③……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文や、シナリオ全文につけられた番号と共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての分類

この映画の主題は待遇表現であるが、そのうちの若干の＜敬語＞——「いらっしゃる」「おっしゃる」「めしあがる」や、「お～になる」「お～する」など——について、＜対人関係＞を中心として、いくつかの場面の中で、どのような使われ方（選択）が行われているかを例示している。

(1) 人間関係

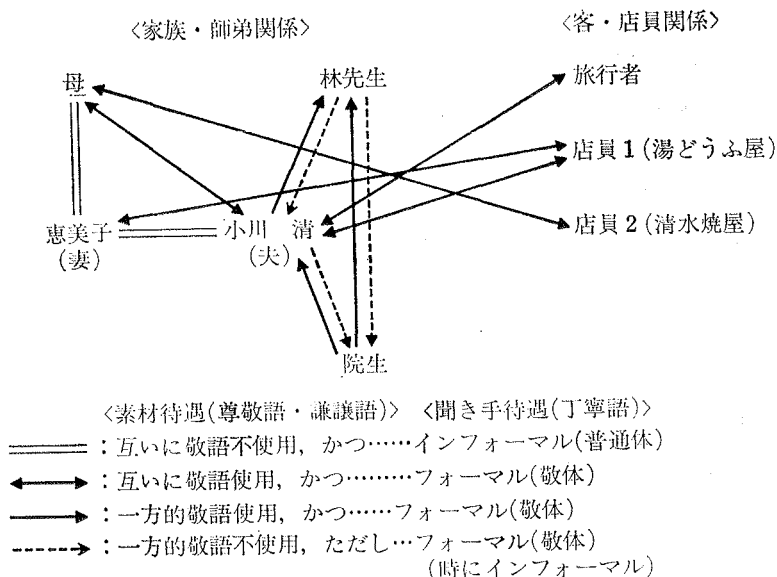
対話のある人間関係は次のようなものである。

家族関係：若い夫婦（大学講師という想定の方の小川清と、その妻 恵美子）、および妻の母（清の義母）

師弟関係：林先生（大学教授で小川清の恩師、または先輩という想定）、小川先生（清）、若い女性（大学院生という想定）

客・店員関係：上記家族と店員 1（湯どうふ屋）、および店員 2（清水焼屋）

これに、直接の対話者として、行きずりの人（旅行者）がひとり一場面に加わる。これらの人間関係とことばによる待遇との関係を図示すれば次のようになる。



この図で分かるとおり、家族関係でも直接の親子のあいだ、および夫婦のあいだでは、原則として敬語（「です／ます」を含めて）は使われていない。娘が母を「お母さん」呼んでいること、娘が「おとうふ」と言っていることぐらいが例外と言え例外である。一方、「夫」と「妻の母」という義理の

間柄では、かなり高い敬意表現が使われている。これについては、日本人でも、丁寧すぎる、他人行儀だと感ずる者がいるかもしれない。個人や社会階層による言語習慣の違いと言わざるをえないだろう。また、学習者の側にも、母語文化との違いにより、不可思議に思う者も少なくないかもしれない。

家族以外の関係については、すべて敬語表現が用いられている。師から弟子へのように常識的な上→下の関係が明らかな場合でも、尊敬語や謙譲語こそ用いられていないが、敬体（丁寧体）は用いられている。また、客と店員とのあいだで、かなりの敬語が用いられていることを不可解とする学習者が意外に多いかもしれない。もしそうなら、敬語の用法を上・下だけで解釈する傾向から抜け出していないことを示している。

（２） 場面の構成

この映画の場面の構成・内容はおよそ次のようである。

場面Ⅰ 京都の町並み（セリフなし）

- 映画の舞台の紹介

場面Ⅱ 駅プラットフォームで（①～⑬）

- 新幹線の到着
- 登場人物の紹介（迎える二人、来る人）
- 久しぶりのあいさつ

場面Ⅲ タクシー乗り場で（⑭～⑳）

- 所用のため一人離れる（大学へ行く）
- そのためのあいさつ

場面Ⅳ 大学の研究室で（㉑～㉙）

- 言付けをする、言付けを伝える
- 電話で連絡をとる
- 林先生に対する小川先生の依頼
- 奈良へ遊びに行くことの申し出、その断り方、その断る理由

場面Ⅴ 川のほとりで (53～56)

- 道きき、道の説明

場面Ⅵ 庭園の前で (57～60)

場面Ⅶ 山門を背にして (61～68)

- 提案のしかた

場面Ⅷ 湯どうふ屋で (69～86)

- 案内、注文をとる、注文をきめる
- 接客用語
- 提案のしかた

場面Ⅸ 清水寺へ向かう坂道で (87～102)

- 接客用語
- 買物用語

場面Ⅹ 清水寺で (103～104)

- 提案のしかた

上記Ⅰ～Ⅹの場面は、言語表現との関連でさらに2つから5つの小場面に分割することができるが、それはそれぞれの解説で扱うことにする。

なお、舞台となる京都やそこに出てくる風景、古寺、庭園、湯どうふ屋、焼き物屋なども興味のあるところであり、日本紹介の一端として、事情の許す限り説明して学習を楽しくすることに心がけてもよいだろう。しかし、これらの背景(風物)は言語表現と固定的関係があるわけではないから、表現の学習の素材程度にとどめたい。また、舞台が京都なら京都方言が出てきて当然だと考える人もいるかもしれないが、そうしないのは学習の段階を考えて、広く一般的に使われる日本語の提示という主旨から離れないための配慮である。

上記(1)(2)に基づいて、言語場面を大きくまとめれば、およそ次のようになる。

1) 家族関係の一例とことば遣い

——久しぶりのあいさつ、各種用件についての提案のしかた、など

2) 師弟関係の一例とことば遣い

——伝言、申し出のし方・その断り方、など

3) 客と店員とのことば遣い（食事・買物）

——接客用語、注文のしかた、など

4) 未知の人（旅行者）との会話の一例

——道きき、道の説明

（3）本書における敬語の分類

すでに触れたことだが、この映画のサブタイトルである「待遇表現」は、むしろ狭義の待遇表現を指しており、扱われている表現の中心は敬意表現である。敬意表現といっても、広い意味の待遇表現の見地からは、厳密には敬語を使うとは限らないのであるが、すでに述べたようにこの映画は「敬語の用法」が中心となっているとみてさしつかえない。したがって、敬語の学習を効果的にすることを目指した分類は必要不可欠なものであるといってい

だろう。

敬語の分類にはいくつかの観点があり、研究者によって大なり小なり異なることが多い。伝統的な尊敬語・謙譲語・丁寧語という分類は便利ではあるが、現実の敬語をすべてこれだけにふり分けることは無理が大きい。かといって、あまりくわしく分類することは学習者をとまどわせ、学習のさまたげになることがある。また、分類そのものよりも、分類されたものに対する説明——定義づけ——のほうがはるかに大きい意味をもっている。例えば謙譲語について「自分を低めて…」というような説明を強調することは、学習者にいたずらに心理的抵抗を起こさせ、敬語を封建的意識の残存とだけ解釈する危険があり、習得のさまたげとなることがある。また、現実の敬語について、誤用か否かが論じられるとき、日本人・外国人を問わず、論者の根拠が個人の分類に基づいており、他者とのくいちがいに気づいていないことがあ

るのにも注意を要する。

敬語の分類は明治以降かなり多くの試みがなされているので、それについては参考文献を参照されたい。本書では、一般の分類や学習者の便を考えて、次の4分類とする。

- ①尊敬語（主体敬語）：話し手や話し手側以外の人（主体）の動作・状態
・所有などについて、話し手がその人を高く待遇する語
- ②謙譲語（客体敬語）：話し手自身、および話し手側と認める人の行為についての表現をとおして、その行為の及ぶ先（客体）を高く待遇する語
- ③美化語（丁重語）：話しの中に出てくる物事を表現する場合、主として聞き手への配慮から、話し手が自分のことば遣いの品位を保とうとする語
- ④丁寧語（聞き手敬語）：話し手がかばら聞き手に対して丁寧意識を示す語

敬語使用に限らないが、日常の＜文＞は「話し手」と「聞き手」があって初めて存在するものであるから、上記①の尊敬語、②の謙譲語といえども聞き手への配慮が横たわっていることは忘れてはならない。③の美化語（丁重語）はいわゆる「美化語」や「丁重語」と呼ばれているものをあわせて扱い、さらに「改まり語」とでも名づけたい「こちら、そちら、あちら」や「のちほど、当日、本日」や「少々」などに類する語（国文法では敬語とは扱われない）をも含めた考えである。「いたします／まいります／存じます／いただきます」なども、現実の用法としては、謙譲語よりもむしろこの美化語（丁重語）に含めたほうがよいと思われる場合が多いが、混乱を避けるため謙譲語扱いとする。

なお、この映画の人称詞については、自称詞（一人称詞）として「わたしの（論文）」という言い方が一度「わたしも」が二度出てくるだけであり、「対称詞」（二人称詞）は、「お母さん」と「○○先生」を除いて皆無であるので、特には取り上げないことにする。

この映画に出てくる敬語の用例を上の4つの分類に当てはめれば次のようになる。

①尊敬語（主体敬語）：お～さん（お母さん①⑩⑬⑤⑥⑩，お父さん④）；～さん（清さん⑤⑫）；～先生（林先生⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

②謙譲語（客体敬語）：家内④⑨；他人に言う場合の自分（側）の親族名（たとえば、母④⑨⑩）；いただく（いただきます⑦⑩⑪，いただけませんか⑦⑩，など）；かしこまる（かしこまりました⑦⑩⑪⑫）；うかがう（うかがいますが⑤⑨）；お～する（お持ちしましょう⑦，お願いします⑩，お話しした論文④⑨）；ご～する（ごぶさたしております③）；お～いたす（お願いいたします④⑨，お持ちいたします⑦⑩，お待たせいたしました⑨）；ご覧いただく④⑨；～ておる（ごぶさたいたしております③，来ております④⑨）

③美化語（丁寧語）：のちほど②⑩；こちら③④⑤⑥；そちら③④；どうぞ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅

敬意表現は、ふつう、要素としての敬語を含みつつ、その<文>全体の形式で表されるものであるから、上記のように<語>単位の分類で事足りりとするようなことがあってはならない。文全体が持つ文法的性格や表現意図や丁寧さのレベルへの注意が必要である。たとえば、学習者は「ご覧」という語を尊敬語のひとつとして覚えたとしても、それが「ご覧になる／くださる／のとおりに」などの形で使われれば尊敬表現に直結していることが分かるが、「ご覧いただく」のような形になると、これが謙譲表現であることがすぐ分かるとは限らない。また、「あっちをご覧(なさい)」や「来てご覧！」が上位者に使えないということも説明を受けなければ分からない。「なさい／おっしゃい」などの命令形が敬語であっても上位者に使えないこと、一方「(～) ください」は同じ命令形であっても上位者に使えることなど、機能についての細かい指導が要求されている。

また、次のような表現形式は、語の分析としては上記の分類のいずれかに入れることができるとしても、あいさつ語や慣用句として指導するほうが有効であることも注意すべきことであろう。

ごぶさたしております③、よくいらっしゃいました④、すみません⑨
⑧⑧、失礼します⑩⑩、お願いします⑥⑥、ちょっとかかいますが⑥③、かしこまりました⑦⑦⑨⑨、お待たせいたしました⑧③、いらっしゃいませ⑧⑨

なお、この映画では、次の言い方も大切な指導項目である。

○導入・前置きとしての「～が」(④③④③⑥③)

○文を中止する言い方(「～まして」④⑨、「～ますので」⑤①)

これらについては、この表現が出てくる箇所でも、また、次の30巻の学習項目の整理で触れる。これらは、狭義の敬語の問題ではないが、敬意表現とは深い関係がある。

(4) 敬語の意味

学習者は、敬語の学習に心理的抵抗を覚えることがある。それは、語彙的

にも文法的にも複雑だということ以外に、なぜ敬語を使うのかという本質的問題の理解を求めていることが多い。事実の伝達以上の表現価値を日本人は敬語に負わせているからである。広い意味の敬語（敬意表現）なら、どの言語にもあるといえようが、日本語ではそれを語彙的にも文法的にも細部にわたって際立たせなければならない。しかし、日本語全体の中で敬語使用は敬語不使用と相補的關係にあり、敬語使用のみが重要であるというわけではない。場に応じて変わるのが待遇表現であるとすれば、その待遇表現の根幹をなすと一般に考えられている敬語はどのような意味で使われているのか、学習者の疑問に答える心構えはしておかなければならないだろう。とはいえ、この難問には大まかにしか答えられない。日本人論、日本文化論の問題でもあるからである。ここでは、次のような観点の、その複雑な組み合わせであるということにしておきたい。

- 1) 日本人の人間尊重観——年齢、地位、能力、恩恵などに対する敬意的配慮
- 2) 社会的礼儀作法としての言語観——改まり、へだて（距離）などをよしとする人間関係への配慮
- 3) 品位、威厳等の保持——自らの教養、美的感覚、品位、威厳等の開示と保持

これらが社会的・心理的人間関係——上・下、ウチ・ソト、恩恵・被恩恵など——という枠組でコントロールされながら言語表現（敬語行動）として実現するものだと考えられる。枠によるコントロールという＜敬語の目的と方法＞については、この巻および次の巻の学習項目の整理で触れるが、くわしく解説する余裕はないだろう。

2.2.3. 言語場面、言語表現についての解説

以下、各場面に区切って解説する。教師から何の説明もなく、いきなり見せる場合と仮定して話をすすめることにする。

I 京都の町並み（セリフなし）

テーマ・タイトル「よく いらっしゃいました——待遇表現1——」が消えると、うす明りの夜空に、シルエットのように、ひときわ高く五重の塔が映る。遠くに山の輪郭のようなものが見える。画面の下は暗い。つづいて画面が少しずつ明るくなることから、これが夜明けであることが分かる。同時にシルエットの五重の塔がはっきり姿を見せ、下の暗部は大きな町並みだったことが分かる。夜明けの京都全景、舞台の導入である。

ここまで、この町がどこの町であるかは、訪れたことのある者か写真などで見たことのある者以外には分かるまい。この町がどこであるかを想像させながら、次の場面Ⅱで京都駅のプラットホームが現れるまで待ってもいいし、一時停止で、画面の説明をするのもいいだろう。

全市を見おろすような大きな塔は東寺（とうじ）の五重の塔（東寺は706年の建立）。右手には京都タワーが見える。塔の下は京都駅をはじめとするビル群。

京都は794年から1868年まで日本の首都で、平安京と称した。皇室との関係が深く御所（ごしよ）やいくつかの離宮があり、また平安時代以来、絵画・彫刻・建築・工芸の中心地として代表作も多く残されている。宗教都市として社寺に富み、優れた庭園も多い。周囲を囲む山には風光明媚の所が多く、京都大学を始め学校も多い。旧市街は東西南北に道路が整然としている。人口は約146万。西京、京とも呼ばれた。代表的な国際観光都市である。

Ⅱ 駅のプラットホームで（①～⑮）

駅のプラットホームが映し出される。エスカレーター、案内板などが見える。列車が到着する。これが新幹線（1964年開通）。駅のアナウンスは「…ひかり143号……番線に到着。……白線までさがってお待ちください……」「京都、京都です……」と聞こえるが、音声は不明瞭。指導の対象とは考えられていない。日本の列車の駅では発着時にほぼ必ずアナウンスがあるということも教えてもいいだろう。学生服を着た高校生らしい姿も見える。

Ⅱ－１ 母を迎えて(１) (①～⑥)

列車が到着すると、若い男女が老婦人を迎え、あいさつを交わす。

恵美子「①お母さん。」

母 「②あ、恵美子。」

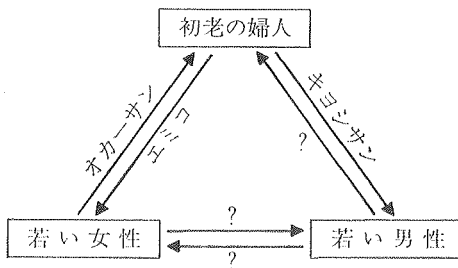
清 「③ごぶさたしております。」

④よくいらっしゃいました。」

母 「⑤清さん、お迎えありがとう。」

清 「⑥いえ。」

この３人がどのような関係かは、すぐには察しのつかない学習者も多いだろう。関係を解く鍵の第一は呼称であるが、日本人の呼称についての知識がなければ鍵として使えない。ここで早くもことば（言語習慣）と文化（人間関係のとらえ方）との問題にぶつかる。セリフ①～⑥だけで学習者に３人の関係を推測させてみるのもいいだろう。日本人でも３人の関係を断言する根拠は表現されていない。また、二人連れの男女の年齢についての判断もかなりまちまちになるだろうと考えられる。初老の婦人と若い男女とだけしておく、ここまでで３人の関係が分かるのは次のことだけである。



初老の婦人と若い女性との関係は親子だと推測がつきやすい（絶対的ではない）が、初老の婦人から「キョシサン」と呼ばれる男性は、他の２人とどういう関係にあるかはまだ分からない。

若い男女が夫婦であると立証する言語上の根拠もない。友人であっても、婚約者であっても、その他であってもよい。ただし、初老の婦人と清は相当丁寧な話し方をしているのが特徴的であり、重要な推測の根拠であるが、多くの学習者にはこの丁寧さがかえって判断のじゃまになるだろう。この３人の関係は次の場面Ⅱ－２へ行ってもう少しはっきりする。

①の「お母さん」は子どもから母親への最も一般的な呼びかけ語。自分より上位に位置する親族名称は「(お)～さん」という敬語形式を持つが、音形上デリケートな変化があることに注意。また、親への呼びかけ語は幼児期から成人に近づくにつれて「ママ→お母さん／パパ→お父さん」のように変化するのが一般的。どのような呼称が使われるか、何段階の変化を経るのかは地方や家庭によって異なる。成人の親への呼称は「お母さん／お父さん」がふつうであるという指導でいいだろう。

②の「あ、恵美子」の「あ」は、短く強く発音され、何かに突然気づいた時の感嘆詞。「アー」と長く発音すると意味がいろいろに変わってくる。「恵美子」と呼び捨てにすることは、日本では一般に家族内での上→下の関係に限られると指導したい。ただし、家庭によっては「名前＋サン／チャン」や「エミさん／エミちゃん」のような敬称や愛称や短縮形などが使われることもある。他人である成人間で名前で呼び合うのは特別に親しい友人間で、ほぼプライベートな場合に限られ、若い女性の場合であるとしたい。これに対応する男性の場合は姓が使われる。男性の場合、親しい友人間での「姓」による呼び捨ては生涯つづくことが多い。肉親はもちろん親しい者どうしの間では、名前で呼び捨てにするという言語習慣を持っている学習者には特に注意しておきたい。

③の「ごぶさたしております」は丁寧なあいさつ表現。敬語の分類では謙譲語に位置づけられるが、「ありがとうございます」などと同じく、位置づけなどにはこだわらないほうがよい。この場面では、丁寧さに差はあるが「ごぶさたしています／いたしました／しました」も使える。ただし「ごぶさたしておりました／してました」や「ごぶさたいたします／します」は使えない。テンス・アスペクトの問題である。学習者は一般にこのような場合の「～ております／～ています」の使い方は苦手である。「ごぶさた」は「ご＋ぶ＋さた(御無沙汰)」であるが、「ぶさた」がほとんど使われない現在、一語(名詞およびサ変動詞)として扱うのがよい。「ごぶさた」は訪問や文通が久しくなかったとき、それを詫げるあいさつ語で、似た表現に「お

ひさしぶり（です／でございます）」があるが、こちらは詫びの気持ちは含まれていない。「～ております」の「おる」は「おられる」のような用法もあってやっかいな語だが、ここでは「～ております」全体で「～ています」のさらに丁寧な表現とし、謙譲語としての意味も生きているので、相手側の動作や状態には使わないようにという注意を与えたい。その意味で本書では謙譲語扱いとした。

④の「よくいらっしゃいました」は③と同じく、相手の来訪を歓迎する丁寧なあいさつ表現として扱う。「いらっしゃる」が「よく」とともにあいさつ表現になるのは「来る」の意のときだけで、「行く」「いる」の意のときは<ほめことば>となる。「よくいらっしゃいます」なら「しばしば来る」などの意を尊敬語化した単なる動作表現である。あいさつ語としては類似の場面でも「よくおいでくださいました」も使う。親しい間の「よく来たね」もあいさつ表現となりうる。

以上の③④の表現がかなり丁寧なことから、この男性と初老の婦人との関係はふつうの親子の間柄とは違うことに気づかせたいものである。

⑤「清さん、お迎えありがとうございます」では、この婦人は「清さん」と敬称を使っており、呼び捨ての「恵美子」とは違うことに気づかせること、また「お迎え」という敬語形を使って感謝のあいさつをしていることに注意させる。「お迎え」の「お」は「あなたが（私を）迎えること」という動作主体に対する敬意を表しているので尊敬語に属させるのが適当だろう。また、「お」は本来名詞につくものであり、「迎え」が動詞の連用形であるとしても、連用形はもともと名詞性の強い機能を持っており、「お」によってその名詞的機能が一層顕著になるものである。

なお、2人の丁寧さからみて、「お迎えありがとうございます」と言い、「お迎えありがとうございます」と言っていないことに疑問を抱く学習者がいるかもしれない。この2人が丁寧な物言いをしているという説明の程度にとどめ、2人の関係を推測させてみるのがいいだろう。さらに、④で清が会釈、⑤で婦人がおじぎを

している。「お母さん」と「恵美子」は特におじぎをしていない。婦人の方が深いのは男女差と言ってよいだろうが、この行動でも清との関係を暗示していることに気づかせたい。

⑥の「いえ」は「いいえ」のつづまった形と考えてよく、軽い否定であるが、むしろ「ありがとう（ございます）」に対応する「いいえ、どういたしまして」という全体が「いえ」ひとつに収約されていると見たい。ことば遣いは一般に簡略化されるほど敬意は軽くなるという性質を持っている。

II-2 母を迎えて（2）（⑦～⑮）

出迎えのあいさつが終わって、清は義母の荷物に気づく。さらに、互いにいたわりのことばが交される。

清 「⑦あっ、そのお荷物、お持ちしましょう。」

母 「⑧そうですか。」

⑨すみません。」

清 「⑩お母さん、お疲れじゃありませんか。」

母 「⑪いいえ。」

⑫清さんも、恵美子も元気そうね。」

恵美子「⑬ええ。」

⑭お父さんは元気？」

母 「⑮ええ、とても元気よ。」

⑦の「あっ」という感動詞は、「あ」よりも強く、ここでは気がつくのが遅くて失礼した、という気持ちが込められている。「お荷物」の「お」は丁寧な扱い方をしたい相手側の所有物に対するもので尊敬語。荷物そのものではなくて、荷物の「所有者」に敬意が向けられていることに注意させる。「お持ちしましょう」の「お～する」は動詞を謙譲語化する場合の代表的な形式。この類型表現は、文法上、相手との関係でとらえた自分、または自分側の動作（話題の人物が2人ならば、そのうちの下位者または自分側が、上位者ま

たは相手側に対して行う動作)の表現として用い、相手(側)——話題の人物が2人ならば、下位者の動作が及ぶ先、つまり上位者——に敬意を表するものである。ところが、この「お」について<自分の動作>になぜ「お」を使うのかという疑問が外国人のみならず、一般の日本人にもかなり多い。これは謙譲語をく自分を低めて表現し、結果として……>のような説明だけで終わらせていることの弊害である。この「お」は形式上自分(側)の動作についているように見えるが、本来<あなたのために／あなたへの／あなたにかわって／あなたのことをおもんばかって／……>などの意味(格関係)を持っているものと解するのがよい。学習者には必要以上の説明をすることは避けたいが、補語(多くの場合目的語)への敬意であることは分らせたい。

なお、「お持ちしましょう」の「～ましょう」について、「(いっしょに)行きましょう」のような勧誘を表す意志の表現とだけ理解している学習者には、「お持ちします」との違いが疑問になるかもしれない。そのような学習者には話者の積極的意志表示であっても、「～ます」のもつ直接性(断言性)をやわらげ、押しつけを抑制する効果を「ましょう」が持っていることを知らせたい。

⑧の「そうですか」は疑問文の形をとっているが、納得・許諾を表す。発音に注意。

⑨の「すみません」は「すまない」の丁寧形で、ここでは謝意。感謝と謝罪を一語が合わせもつということは語源的にも文化的にも興味深い。なお、「ありがとう」に代って「すみません」を使う人が多くなっていると言われる。

⑩「お母さん、お疲れじゃありませんか」は、質問と同時に慰労の気持ちを込めている。「お疲れ」の「お」は母に対するもの。「お母さんが」(敬意の対象であり、状態の主体)疲れていること」を表す。「お～だ／です／でございます」(その否定形も)という尊敬表現の型であるから「疲れじゃありませんか」「疲れでしょう」のような言い方はない。

⑪「いいえ」は否定に違いないが、事実か否かよりも、「心配には及ばな

い」「心配してくれてありがとう」などの気持ちを含み、相手に不安を与えないため、相手の気づかいに感謝するため、などの配慮を含めていることが多い。やわらかい音調が要求される。

⑫の「清さんも、恵美子も元気そうね」については、②の「恵美子」、⑤の「清さん」と同様、一方を呼び捨てにし、一方を敬称で呼んでいることに注意させればいだろう。ただし、聞き手待遇としては、「清さん」を含みつつも、「～元気そうね」と普通体（常体）が使われている。この映画では、全体を通じて、母は恵美子に対しては普通体を、清に対しては丁寧体を用いているが、ここで普通体を使っていることは、清を恵美子という実子に近よせて扱っていることになる。かりに「清さんも、恵美子も元気そうですね」と丁寧になれば、よそよそしさが強くなり、恵美子をはみ出させてしまうことになる。この⑫の表現は、母と清の関係、恵美子と清の関係をこれまでより一層明確にしたことになる。なお「元気そうね」は女性の特徴的な言い方といってよく（男性は使わないというわけではない）、女性は一般に、会話では、「～だ」で終わる形を避ける。「だ」のもつ断定的強さを避けるためである。「～だわ」は例外として扱うのがよい。「～そうだ」はここでは眼前の状態を推量して判断する場合の助動詞（様態の助動詞）。形容詞や動詞に続く場合の語形も確認させる。また、それらの否定形に続く場合にも注意させたい（「元気で（は）なさそうだ」など）。

⑬の「ええ」は、もし「はい」とすれば改まり（フォーマリティー）の度合が高くなり、⑫の返事としてはそぐわない。「ええ」は「はい」よりフォーマリティーが低く、「うん」よりずっと高いという指導でよいだろう。むしろ、「ええ」と「はい」とには用法上の別の差異もある。

⑭「お父さんは元気？」の「お父さん」は、この映画では初めて出てくる話中の人物。形の上ではくだれの父>であるかは不明だが、既出の「お母さん」が<私の母>を指しているとすれば、この「お父さんも」それに対応させて<私の父>を意味するのが自然であろう。しかしこれは日本人の習慣を知っている者の解釈であって、学習者はそんなに簡単に特定できるもので

はなく、＜祖父＞を指していると思うかもしれないのである。「元気？」は形容動詞「元氣だ」の語幹用法（形容動詞という扱いをしない立場では別）。この語幹用法はインフォーマルな場面では、男女を問わず、かなり頻度が高い。「～は便利／不便？」「そんなに有名？」などのように。この場面で清が言うとするば、「お父さんはお元氣ですか」となるだろう。

⑮「ええ、とても元氣よ」の「ええ」は⑬と同じ。「元氣よ」は⑭と同じく語幹用法だが、このように直接「よ」が続くのは女性特有。男性なら「元氣だよ」がふつう。

この⑮の文について、学習者によっては、主語を言い表すとするばどんな言い方かという疑問を抱くかもしれない。つまり、妻が夫（そう仮定して）を第三者として子どもに向かって言う場合、どんな呼称が使われるのか、「お父さん」なのか、「かれ」なのか、あるいは＜お前の父＞のような言い方なのか、という疑問である。この場合（親→子）は「お父さん」でよいが、うっかり話を広げると、疑問ばかり抱かせる結果となる。

以上の場面Ⅱ－1、Ⅱ－2を通じて、人間関係についてのあらかじめのイントロダクションがないとするば、学習者は次のような疑問を抱くと考えたほうがよい。

<1> 「お母さん」と呼ばれる女性と「恵美子」と呼ばれる女性とは実の親子らしいが、恵美子と「清さん」と呼ばれる男性とはどんな関係なのか。夫婦らしいが、確かには分らない。友人・同僚・婚約者その他も考えられるのではないか。

<2> 母と恵美子は「です・ます」を使わない話し方をしているが、母と「清さん」との間では敬語が多用されているし、態度も丁重である。恵美子と清が夫婦であれば、清もまた恵美子と同位であり身内の一員であるから、このような敬語の多用は＜おかしい＞のではないか。

<3> 清と恵美子は互いにどのように呼び合い、どのようなことば遣いをするのであろうか。

これらの疑問はすべて以下の場面に持ち越される。<1>の疑問は、言語

上では、④へ行って氷解するはずである。＜2＞は日本人の人間関係と敬語の用法を考えさせる重要な要素であり、広く敬語の用法を考える場合のひとつの基礎的モデルとなりうるものである。この3者の関係とことば遣いとの関連が分かれば、現代敬語の用法に関する理解は大幅に前進すると考えられる。ただ、この映画では、清と恵美子との間の呼称例は提出されていない。その解答も一様ではないだろう。人呼称の問題として別に指導する必要を教えている。

なお、興味のある学習者には、登場人物の服装（母の合わせの着物・帯付き、恵美子の半袖、清の上着）と季節（新緑のころ）の関係に言及してもいいだろう。

なお、母親が「（お父さんは）とても元気よ」と言ったあとの、高らかな笑いとはなぜか、とまどう学習者も少なくないと思われる。一種の照れかくしであるが、この解説は困難である。母から見れば夫、子から見れば父に対する親愛の情の表れとしておいていいだろう。

Ⅲ タクシー乗り場で（⑩～⑲）

駅を出るとタクシー乗り場に行く。清は約束があるので、他の2人と別かれる。

京都のような大きな駅でなくても、ある程度以上大きな駅であれば、駅前に広場があり、タクシー乗り場やバスの停留所、時には駐車場があることを教えてもいいだろう。

恵美子「⑩林先生とのお約束は？」

清 「⑪うん。」

⑫お母さん、ちょっと、大学に用事がありますので、失礼します。」

母 「⑬まあ、お忙しいのに、すみませんでしたねえ。」

清 「⑭では、のちほど。」

母 「⑮はい。」

清 「⑯これ、頼むよ。」

恵美子「㉔はい。」

⑬の「林先生とのお約束は？」の「林先生」がだれであるかはまだ不明。「お約束」の「お」は直接的には恵美子の清に対する敬語であるが、話題の人物「林先生」の扱いも敬意の対象として裏に存在していることも見逃せない。すでに分類の項では「尊敬語」に入れてある。しかし、清と恵美子が対等のことば遣いをしていたとしても、またかりに「林先生」が清より下位者であるとしても起こりうる「お」であるから、美化語的用法といってもさしつかえないと思われる。また、男性が使うことは少ない「お」でもある。「お約束は？」は「～はどうですか／どうなっていますか／……」などの省略として扱ってもよいであろうが、「～は？」はむしろ、相手に何かの用件を思い出させると同時に、その解答を相手にゆだねる提示の文として扱うのがよいだろう（㉔参照）。また、助詞が2つ重なる「～との～」の使い方は学習者は一般に苦手であるので、練習させたい。例えば「（主語が）林先生と約束／相談（を）する→（主語の）林先生との約束／相談」などの例で。これに「お」や「ご」を付加させてみる。ただ、その場合、主語と相手との関係で「お／ご」はだれに敬意が向けられているのかという疑問が出てくるので、教師は明確な見解を持っていなければならない。

⑭「うん」は親しい人の間の応答詞。「はい」のぞんざいな言い方。ここでは「きみの言うことは分かった／おぼえている」などの意。この「うん」は初級の教科書には採用されていないことが多く、学習者によっては初耳かもしれない。丁寧な表現にはそぐわないということは教える必要がある。「です・ます」だけで教えることは、表現レベルの統一上、「うん」が出てきてはならないことを意味している。恵美子に対する清の返事が「うん」であることは、この2人が特別に近い関係にあることを推測させる。

⑮「お母さん、ちょっと、大学に用事がありますので、失礼します」の「ちょっと」は「（大学に）用事がある」にかかるとも、「失礼します」にかかるともとれる。このような「ちょっと」は日常会話で多用され、語彙的に

は「ほんの少し／しばらく」などの意であるが、話者の相手に対する気づかいの表現（あまり迷惑をかけるつもりはないが、など）として機能している（30巻㊸参照）。「失礼します」は、自分の都合で相手に迷惑をかけると判断される場合、つまり礼を欠くと考えられる場合（この場合はその場を離れること）のあいさつ語として広く使われる。この場合の「～ので」は「～から」とも言えるが、「～から」ではくだけすぎの感じが強くなり、ここまでの母→清の会話や態度にはそぐわない（19巻参照）。

ここで「大学（に用事がある）」ということばが出てくることは、先の「林先生」ということばと相まって、清もまた大学関係者であることが想像されよう。

㊸の「まあ」は驚きを表す感動詞。この場合の「まあ」は、次につづく「お忙しいのに、すみませんでしたねえ」から推測されるように、「そのような（大事な）用事があるにもかかわらず、わざわざ出迎えに来てくれた」ことに対する驚きと感謝が込められているということに気づかせたいものである。感動詞は文脈に依存するから、そのような意味は当たり前として済ませるのではなく、驚き、詫び、感謝などの意が一体となっており、しかもある程度の改まりがある場合、女性は「まあ」を使うのが一般的なのである。

「お忙しい」は尊敬語用法。形容詞につく「お」は「あなたが～／あなたにとって～」などの意（格関係）と考えると分かりやすい場合が多い。「～のに」は「～にもかかわらず」の意を表す接統助詞。「から／ので」と意味上の関係は逆になる。「すみませんでしたねえ」の部分は「すみませんねえ」とも言えそうに見えるが、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」との対立と同じく、完了と認めた動作・事柄には「た」形が自然である（㊸参照）。また、「（～た）ねえ」と長く言っているのは、話者の気持ちの強調と言っているだろう。

㊸「では、のちほど」の「のちほど」は「あとで」の改まり表現で、本書では美化語（丁寧語）に入れた。狭義の分類とは別の扱いをすべきものだが、丁寧度の高い文で使われることを知らせたい。「さっき—さきほど」「こ

っち—こちら」「きょう—本日」などの類もこの「改まり表現」として扱うと丁寧さの整合性からみて便利である。なお、「のちほど」「さきほど」などの「ほど」はおよその見当を表す副助詞だが、先行する語の意味の直接性をばやかすはたらきを持ち、敬語表現と深い関係がある。「10分失礼します」とは言い難く、「10分ほど失礼します」がふつうであろう。

㊸の母の「はい」は、これまでの清との話し方のレベルに合っている。

㊹の「これ、頼むよ」は、㊸の「うん」と同じく、恵美子に対してはインフォーマルの表現をしていることを明瞭に示す。特に終助詞「よ」は、「だ」の体につくか、「です・ます」の体につくかを問わず、また男女を問わず、ぞんざいな感じを与えやすいので、使える相手や場に注意させたい。恵美子が言うとするれば「頼むわ」となろう。「たのむ」は何かの処置を人に任せるの意で、この場合、丁寧表現にするとすれば、「頼みます」よりもむしろ「お願いします」がふさわしい。

㊺の恵美子の「はい」は、㊸の母の「はい」と同じく、清に対してある丁寧さを保持している表現である。清の「うん」と対比させる。ただし、現実の夫婦で、妻が夫に対して常に「はい」と言っているわけではない。

なお、このタクシー乗り場で、客（母）がタクシーに乗るのを見とどける前に、清が立ち去ることについてエチケットに反すると感じる学習者もいるかもしれない。

IV 研究室で (㊼～㊾)

大学の研究室（と思われるところ）が映し出され、そこに登場する3人のやりとりが紹介される。大学も他の会社と同じく、社会人の職場であり、そこで提示される待遇表現は、広く社会一般で用いられているものと同類と見ていいだろう。

IV-1 言付けを残して (㊼～㊾)

室内で、50才台と思われる教授らしい男性が若い女性に言う。

林 「㉔ちょっと、図書館へ行ってきます。

㉕小川君が来たら、待つように言ってください。」

院生「㉖はい、分かりました。」

この若い女性は、シナリオでは「院生」となっているが、画面では立場ははっきりしない。助手や秘書なら専用の机ぐらいあるのがふつうだから、学生とでも考えておくより仕方がない。

㉔「ちょっと、図書館へ行ってきます」の「ちょっと」は㉑参照。すぐ戻ってくることを意図している。若い女性に丁寧体で話していることに注意させ、2人の関係を推測させる。「図書館」は何らの限定がついていないときは、聞き手（若い女性）もすぐ了解する図書館ということになる。話し手の属している機関の図書館が常識であろう。図書館と図書室とは区別される。

㉕の「小川君」はだれを指しているかは明示されていないが、㉑㉒の会話と対照すれば推測はつくだろう。また、㉑で恵美子が清と同じ立場で「林先生」と言っているとすれば、林は清を「小川君」と呼んでいるところから、この2人の上下関係は了解される。「～君」は主として男性の間で同輩かそれ以下に対して用いられる軽い敬称（女性同士なら「～さん」がふつう）。したがって「小川君」の動作については敬語は用いられていない。「来たら」を「来ましたら」にすれば聞き手（若い女性）を一層高く扱うことになる。「待つように言ってください」については、「～ように～」が未習の学習者がいるかもしれない。この言い方は練習しないと「待つ言ってください」とか「待ってくださいと言ってください」とかになりやすい。「ように」は文法上複雑な意味を持っているので、この場合は動詞と動詞をつなぐ用法で後の動詞の内容を示すという説明だけで止めておくほうがよい。

「～てください」の「くださる」について一言すれば、「なさる・おっしゃる・いらっしゃる」の命令形がふつう上位者に対しては使えないのに対して、この「くださる」の命令形は上位・下位の区別なく使えるという特徴がある。これは語彙的性質に由来する。「くれる」と対比すると分かりやすい。

「こんどは先生が読みなさい」のような誤用があるので、同じ尊敬語といっても注意が必要である。

⑳の「はい、分かりました」は、全体で応答詞的用法に近く、相手の言ったことを了解し、その通りに行動する等の意を表す。この場合は「はい、承知しました」でもよい。「はい」だけでも、「分かりました／承知しました」だけでも成り立つが、両方でより丁寧さが増す。あいさつや応答は言い惜しみをしない言い方が敬語の基本である。

IV-2 言付けを伝えて (㉗～㉚)

前の場面が言付けを残した場面であり、この場面はその言付けを実行する——目的とする人に伝える——場面となる。清が研究室に入ってくる。ノックもしないで入ってくることに疑義を抱く者も多いかもしれない。

清 「㉗林先生は、いらっしゃいますか。」

院生 ㉘あつ、小川先生。

㉙いま、林先生は、図書館へいらっしゃいました。

㉚すぐお帰りになります。

「㉛こちらでお待ちになるようにおっしゃいました。」

清 「㉜そうですね。」

㉗「林先生は、いらっしゃいますか」については、林先生の動作について「いらっしゃる」(←いる)という尊敬語を、聞き手の女性に対しては「ます」という丁寧語を使っていることを再確認させたい。敬語動詞が文末にくるときは常に「ます形」だと誤解している学習者が多い。敬語動詞が「ます」と共に使われやすいのは、目の相手(聞き手)に対しても尊敬語や謙譲語を使う場合が多いからである。「林先生は、いらっしゃる／いらっしゃった？」のような言い方が正しいことを知らない場合がよくある。学習者は一般に敬語動詞の常体は使いにくいようである(3.3.参照)。

㉘で室内の女性は、入ってきた男性を見て、すぐ「あつ、小川先生。」と

言っているから、少なくとも女性にとってこの男性は以前から知っている人物ということになるし、＜教師＞であるらしいことも視聴者に教えている。清の姓が「小川」であることも分かる。どのようなポストにいるかは不明。

㉔の場合の「いらっしゃる」は「行く」の意。「いま」は、狭い意味の「現在」を指すだけでなく、現在を中心とする近い過去にも、近い未来にも使われる。ここでは近い過去。㉕では近い未来。

㉖「すぐお帰りになります」の「お～になる」は、この映画で初めて提出された尊敬語形式。動作主の行為・状態を表す動詞を尊敬語化する最も代表的な型である（3.2.参照）。

㉗「こちらでお待ちになるようにおっしゃいました」の「こちらで」は「ここで」の丁寧表現。本書では美化語（丁寧語）という区分に属させている。㉘で述べたが、「ここーこちら、そこーそちら、あそこーあちら、どこーどちら」の右側の語は本来＜方向＞を指示することばだが、その方向性のゆえに敬意表現に応用される。「ここ・そこ」などの直接の場所指示を方向性でやわらげたり、ぼやかしたりすることが敬語の本質に合致するからである。「お待ちになる」は㉖の「お帰りになる」と同様の尊敬語化。「おっしゃる」は「言う」の尊敬語。ここでも㉕と同じく「（動詞）ように（動詞）」の言い方は練習したい。

㉙の「そうですか」は了解・承諾を表す。㉘と同様、下降調のイントネーションに注意。

IV-3 電話で連絡する（㉚～㉞）

院生は、清の来訪を図書館へ行った林先生に伝えるために、電話をする。院生「㉚あつ、そちらに、林先生、いらっしゃいますか。

㉛……はい。

㉜あつ、林先生、小川先生が来られて、お待ちです。

㉝……はい、お願いします。

㉞（清の方を向いて）いま、いらっしゃいます。」

清 「㉔そうですか。

㉔ありがとうございます。」

㉔の冒頭の「あっ」は、先方（図書館）が受話器を取り上げ電話口に出たことを確認した場合、特にこちらの目指す相手が直接出た場合に思わず出る感動詞。この場合、おそらく先方は「（こちらは）図書館です」のような応答があったと考えられる。この場面は電話のかけ方を教えるのが目的ではないので簡略化されている。こちらが名乗らないのは一般的には変ではあるが、交際の頻繁な、あるいは互いに相手が分かる場合には往々ありうることであり、いきなり用件に入ってかまわない状況が成り立っているのだと見ればよいだろう。「そちらに」は「そこに」の丁重表現、㉔参照。「林先生」と「いらっしゃいますか」とを結ぶ助詞はないが、このような会話ではないことが多い。

㉔「…はい。」の「……」の部分は先方の返答であるから、学習者には推測させてみるのがよい。「はい、いらっしゃいます。少々お待ちください」などが出るかどうか。

㉔の「あっ」は㉔の「あっ」と同じく、期待する相手が出て、それを確認したことを表す。「あっ」が出るかどうかは、その時の状況や個人の癖にもよるが、一般には声を聞いただけで相手が互いに分かるような間柄に限られよう。「来られて」はこの映画で初めて出された「(ら)れる」の尊敬語用法。助動詞「(ら)れる」は、自発・可能・受身・尊敬の4つの意味・用法のうち、学習者の既習の項目はどれかを確認したうえで、それとの対比で指導するのがよいだろう。シンタクスを重視する指導が自ずと要求されよう。

「お待ちです」は「お～です」の型、㉔参照。この㉔のセリフで留意したいのは、行動主に対する敬語の使い分けである。話し手の若い女性(院生)は、「林先生」に対しては「いらっしゃる」(㉔で「行く」、㉔で「いる」の意)を用い、「小川先生」に対しては「来られる」を用いている。「いらっしゃる」とも言えるから、どこまで意識的か否かは不明だが、一般に、同じ尊敬

語形式でも「(ら)れる」よりは「お～になる」や交替形式(「いらっしゃる」など)のほうが敬度が高いと考えられている。この女性が意識的に使い分けたとすれば、林先生と小川先生の上下関係を知っており、それを敬語行動のうゑで明示したことになる。敬語は語彙単位でみても各語の敬度が互いに階層をなしていると考えられるが、世代や地域や個人によりその判断に差がある。

㊸「…はい、お願いします」の「…」の部分は先方(林先生)のことは、例えば「すぐ行きます」などを推測させたい。「お願いします」は日常会話で多用されるが、意味上、冗語的性格の強い使い方がよくなされるので、丁寧さを強調する慣用句として扱いたい。すべての場合がそうではないが、このセリフのように話者の期待を表し、それも形式化している場合がある。自己紹介などで「よろしくお願いします」とつけ加えるのと同類で直訳はしないほうがよい。

㊹「いま、いらっしゃいます」は、電話での連絡の結果を清に伝えるもの。「いま」は㊸で述べたように、近い未来を表す。

㊸㊹については、もはや説明の要もないだろう。ただ、㊹の「ありがとう」については、他のセリフで清が院生に「ます」を使っているところから、「ありがとうございます」と言うべきではないかという疑問が出る可能性はある。「ありがとう」には、語形上いわば中庸の丁寧さ(「です」の体)は欠けている。しかし、この疑問は学習者の敬語レベルの理解に当たって象徴的な疑問なのである。

以上Ⅳ-3の場面では、林先生↔院生↔小川先生のセリフ(言語待遇)を通じて、3人の人間関係が示されている。「林先生」は「～てください」以外は「小川先生」にも院生にも尊敬語や謙譲語は使っていない。「小川先生」は林先生へは尊敬語を、院生へは丁寧語を用いている。したがって、この3人では林先生が最も高い立場にあることが分かる。「小川先生」と院生との間もあまり近く(親しく)ないことが分かる。

この場面は、ほぼ上下の人間関係で敬語の用法が説明できる内容である

が、敬語の学習がもう一段進んだ学習者には、若い女性の立場の解釈によって、新たな疑問を起こさせる興味深い場面でもある。

なお、院生らしい若い女性が電話の件を小川先生（清）に伝えたあと、あたりに人なきがごとくにソファに座り、本を開くのは気にかかる。二人はふだんの付き合いがないので、話題もなかったのだろう、などと考える以外にあるまい。助手や秘書だったら、せめてお茶の用意をしようとするのが習慣だからだ。（この部分は、もともと映画として用意されていたが、映画の全体が時間として長いのでカットすることにした。）

IV—4 論文について（④⑩～④⑤）

図書館から林先生が研究室に戻ってくる。清は用件を言う。

林「④⑩ああ、すみません。」

清「④⑪いいえ。」

林「④⑫どうぞ、こちらへ。」

清「④⑬この間、お話しした私の論文ですが、（林に論文を差し出す）ご覧いただけますか。」

林「④⑭はい、読ませてもらいましょう。」

清「④⑮よろしく願いいたします。」

ここでは、清が林先生を訪ねてきた目的、つまり論文を読んでもらいたいという依頼についての表現が中心である。林先生も清もかなり丁寧な言い方をしていることに注意させる。

④⑩「ああ、すみません」の「ああ」も既出の「あっ」などと同類で相手を確認したことを表す。「ああ」は「あっ」ほど突然でないこと、驚きの弱いこと、予測していたことを表す。「すみません」は軽い謝罪で「（あなたを）待たせて申しわけない」の意。この場合、林先生がフルセンテンスで表現するとすれば、「待たせてすみません」となったかもしれないし、「お待たせしてすみません」となったかもしれない。林先生はこの映画で清にも院生にも

尊敬語や謙譲語は使っていないが、ここで「お待たせして～」という謙譲語を使ったとしても、必ずしもバランスがくずれるとはいえない。それは「お待たせしてすみません」がすでにかなり慣用的なあいさつ語に近くなっていること、また、相手が職場上の下位者であるとしても、一人前の社会人であること、ふだん親密なつき合いをしている間柄とも見えないこと、などの理由による。分類からみた形式の適用は現実にはそんなに簡単に割り切れない。

④の「いいえ」は「どういたしまして」の意を含む。しかし「いいえ、どういたしまして」あるいは「どういたしまして」と全部言ったとすれば、この場面では重すぎる（丁重すぎる）。この判断は学習者には難しいが、丁重すぎる表現は、へたをすると、皮肉となる。

④の「どうぞ、こちらへ」は、方角（道筋）を案内したり、いすに座らせたりするときの表現。「どうぞ」も「こちら」も本書の分類では美化語（丁重語）扱いとしている。特に、2つ重なったこの表現は敬意表現の中で相当に幅広く用いられるもので、敬度のかかなり高い文脈にも自由に当てはまるので、語感としての丁寧度はかなり高い。

④「この間、お話しした私の論文ですが、ご覧いただけますか」はいくつかの指導項目を含む。「この間」は話している現在（きょう）からみて、少し前の日。＜少し前＞は限定はできないが、一般に2、3日以上前を指す。しかし、どのくらい以前にさかのぼれるかはかなり主観的である。聞き手に対して、少なくとも、＜いつ＞のことか思い出せる範囲内の以前でなければならない。「お話しした」は「お～する」という謙譲語形式で、完了形を使った連体用法。「論文」は職業上の「研究論文」。「～ですが」の「が」はこの文の主要指導項目のひとつ。会話で多用される一種の話題の提示や前置きの用法。④⑤にも出る。30巻の学習項目の整理を参照のこと。

「ご覧いただけますか」は「見てもらえるか」の謙譲語形式であり、「お／ご～いただく」の型の特殊例として扱っていいだろう。「ご覧」は「見る」の尊敬語で、「お見になる」という言い方は不可能なので漢語を利用したもの。「ご」と「覧」とは切り離せない一語となっている。学習者に最も

注意を要するのは、この「いただく」の部分で、このセリフでは「いただけますか」と可能形になっていることである。発音上のわずかな違いなので「ご覧いただきます(か)」との違いに気づかないことがよくある。「ご覧いただきます」だったら、受益を意図する謙譲語を使ってはいが話者の意志の押しつけになってしまう。「ご覧いただけますか」で話者の希望と同時に相手の意志を尊重することになる。この文では「ご覧(になって)くださいませんか」とほとんど同意で、「～てくださいませんか」ならよく分かるが、「～ていただけませんか」は分かりにくいという実情がある。基本的には授受表現の問題だが、「～てくださいませんか」より「～ていただけませんか」のほうが、謙譲語を使うだけ、押しつけをおさえて、相手の意志を尊重する度合が高くなると言える。しかし、場面や事柄に応じて使い分ける必要があるが、いつ、どちらがよいかは学習者にはたいへん分かりにくいことで、話し手の心理に言及する必要がある。なお、付け加えれば、このセリフで「ご覧いただけますか」と言って、「ご覧いただけませんか」というより丁寧な形をとらなかったのは、すでに一度話題として提出されているからだと考えていいだろう。もし、この用件が初めて持ち出されるものだったら「～ていただけるとありがたいんですが」のように、より丁寧度の高い表現をとることが十分に考えられる。

④の「はい、読ませてもらいましょう」の「読ませてもらう」は「動詞の使役形+てもらう」で、現代日本語で多用される待遇形式のひとつ。「(さ)せていただく」という狭義の敬語こそ使われていないが、「～(さ)せてもらう」もまた、動作主——自分や自分側——が勝手にするのではなく、相手の許可・容認のもとに行うの意を含んでいるからである。さらに、この文に限っていえば、「もらう」が本来持っている何らかの益を受けるという意味から、林先生は清の論文を読むことによって自らにも利するところがあるだろうと考えていると解しても無理ではない。ただし、日常会話で広く使われるこの「～(さ)せてもらう／いただく」はかなり形式化(形骸化)しており、事実として相手が許可・容認をしたか否かではなく、話し手がそのような期

待をこめて、自己の行為が勝手気ままのゆえでないことを認めてもらおうとする表現になっている。

〔1〕 せんえつですが、本日の司会を勤めさせていただきます。

などがその例である。この「～(さ)せていただく」は、一方で、相手にも責任を負わせるニュアンスを含んでいるので、多用するといや味を感じさせることもある。関西方面の言い方が次第に広がったものと言われている。なお、文末の「～ましょう」については⑦参照。

④⑤「よろしく願いいたします」は、あいさつ語として、④⑥の「お願いします」より丁寧な、かしこまった表現としていいだろう。④⑥でも触れたが、何かを依頼する場合、好意を期待する場合などの慣用表現——あまり意味のない社交辞令——として扱いたい。日本人にとっては日常的な表現であるが、このような表現を持たない学習者の場合は、くどくどしさ、押し売り、卑屈を感じることもある。けれども、改まった場では使えるようにしたい。

IV—5 あしたの休みについて (④⑥～⑤②)

前の場面のつづきであり、ひとつの用件が終わって、話題の転換が行われる。

林 「④⑥ところで、あしたの休みは？」

清 「④⑦何か。」

林 「④⑧ゼミの学生と奈良へ遊びに行くんですが、良かったら、いっしょに来ませんか。」

清 「④⑨東京から家内の母が来ておりまして——。」

林 「⑤⑩ああ、お母さんがいらっしゃったんですか。」

清 「⑤⑪それで、どこかへ案内しようと思いますので——。」

林 「⑤⑫ああ、そうですか。」

④⑥の「ところで」は話題の転換を示す接続詞。「休み」はそれ自体では多義的であるが、主として仕事や勉強をやめる特定の時間・日・期間について

使われる。ここでは「日曜日」と考えていいだろう。女性だったら「お休み」と美化語化することが多い。「…の休みは？」のあととは何が省かれているか推測させたい。「予定がありますか／ひまですか／あいていますか／……」などいろいろ考えられるが、必ずしもびったりする表現があるとは限らない。このような「～は？」による文の中止用法は日常会話ではごくふつうのことであり、特に多少とも改まった場面においては全部言わないで相手に答えさせようとする人が多い。文法的には「は」の提示機能の力である（⑩参照）。「あしたの休みは何か都合が——」のような段階で中止させることもあろう。いずれにしても「あなたにどんな予定があるか」の意味が理解されていればよい。

④⑦「何か」のあとも文を補わせてみたい。「何かご用事／ご希望でも（おありでしょうか）」のような答えが出れば、「何か」の意味が分かったことになる。ただし、日本語としては何かだけで十分であって、述語を明示する必要はない。明示すれば切口上の強さを犯す危険もある。

④⑧の「ゼミの学生」はゼミのクラスに出席している学生。「ゼミ」はゼミナールの短縮形で、ドイツ語の seminar から。日本語では大学の授業に関しては「演習」と訳されることが多い。講師の講義が中心ではなく、学生の自発的研究発表としての授業を指すのがふつう。一般的に小グループで行われる。次の「遊びに行く」の「遊び」は、趣味・リクリエーションとして好きなことをするの意のほかに、伝統的な意味の学芸の修行のために他郷へ行くの意が結びついており、楽しみながら勉学するの意が込められている。もちろん、このセリフだけの文脈では明らかでないが、リクリエーションをかねて研究・調査に行くということを遠慮がちに言ったものだと思いたい。（2人の研究テーマが奈良に関係しているということは次の映画—30巻—で分かる。）「～に行くんですが」は、④③の「この間お話しした私の論文ですが」と同様、話題の提示であり、後続文への導入の役目を果たす。話者の言いたいことの中心は後続の文にある。「良かったら」は「あなたにとって都合が良かったら」や「あなたが希望すれば」の意で、何かの提案などを行う場合に、

相手の意志を尊重する意図を表す前置きの表現。より丁寧には「よろしかったら」(30巻⑦)という形がある。「いっしょに来ませんか」と「来る」が使われているのは、話者の心がすでに目的地(奈良)にある場合や、「われわれの(仲間の)ところへ来て参加する」などの気持ちが込められている場合である。この文では話者が京都にいるのだから「いっしょに行きませんか」と言っても少しもおかしくない。かえって「(遊びに)行く」と対応しやすい。なお、この文で「が」の前の文と後の文との主語の違いをおさえておきたい。「～んです」自体については、「～ます。それで…」のように考える分かりやすとい。⑤⑥参照。「奈良」については30巻参照。

④「東京から家内の母が来ておりまして——」について。「家内」は「妻」の謙譲語。身内の者を他人に述べるときは、「お父さん」「お母さん」「奥さん」「ご主人」などの尊敬語は使えないことを徹底させる。親族名称をそのまま使えば、謙譲語の機能を負わせることになるが、「妻」より「家内」のほうが一般的であり、「夫」より「主人」のほうが一般的であるという面倒くささがある(①参照)。「来ておりまして」の「～ております」は「～ています」のさらに丁寧な表現で、丁重語としてもいいが、謙譲語とするほうが実用上安全。③の「ごぶさたしております」を参照されたい。

この文では「……来ておりまして——」と文を中止していることが大切である(30巻3.2.参照)。改まった場面の会話では使われやすいものであり、特に、断りの表現では、相手の気持ちを可能な限り傷つけまいとする意識から、断定や直接拒否の表現形式はできるだけ避ける傾向がある。そのため、話者の置かれている状況・立場などだけを述べ、それが断りの理由であること(本心とは関係ないこと)を相手にさとらせるという形をとる。一方相手は断りの部分を言わせることなく、話し手の意図を理解しなければならない。これは日本人にとっては決して難しいことではないことを理解させたい。「せっかくですが…」「急用がありまして…」などの場合も同じ。④⑤参照。

⑤「ああ、お母さんがいらっしゃったんですか」の「～んですか」は通常の疑問文ではなく、「…がいらっしゃった。なるほど、だから～」 「…がいら

やった。そうですか、それなら～」などと同じく、相手の言ったことを反芻しながら、相手が後続文で明示しなかったその内容・意図を納得したことを表す。30巻⑩参照。

⑤の「それで」は、⑨の自分の発言、⑩の林先生の発言を受けて、次の文につなぐ役目を果たす接続詞。「ですから／だから」などと意味は近似しているが、ここの文脈ではく接続の自然さ>からみてそぐわない。「(です／だ)から」は強すぎ、文を中止するような遠慮のある言い方に適さないのである。「案内しようと思いますので――」は⑨と同じく文の中止用法で、理由だけ述べて、あとの文(断りの文)を避けた言い方。「～ますので」を「～ますから」にすると、口語的性格が強くなり、この場のかなり改まった(丁寧な)表現の流れにはそぐわない。むしろ誤用となる。

V 川のほとりで (⑤③～⑤⑥)

画面は一転し、新緑の山ときれいな川の流れが映る。嵐山(あらしやま)である。清・恵美子・母の3人が川のほとりを歩き、景色を見ている。

嵐山は京都市西部にある景勝地。向こうの山が嵐山。春の桜、秋の紅葉は有名。川の名は桂川(かつらがわ)。橋は渡月橋(とげつきょう)と呼ばれ、名月の夜、川の上流から見ると、月が橋を渡るように眺められたところから名づけられたという。

旅行者「⑤③ちょっといかがいますが、法輪寺へはどう行ったらいいのでしょうか。」

清 「⑤④ああ、法輪寺でしたら、あの橋を渡って、右に曲がるとすぐ左にあります。」

旅行者「⑤⑤そうですか。」

⑤⑥ありがとうございました。」

ここでは、道きき、道の説明が中心となる。

⑤③の「ちょっといかがいますが」は、この文全体で人にものを尋ねるとき

の丁寧な口火の切り方として扱いたい。呼びかけの一種と考えてもよい。「うかがう」は「聞く(耳にする)」「質問する」「訪れる」の謙譲語で、ここでは「質問する」。「ちょっと」については⑩参照。未知の人(成人)に対して「ちょっとききますが」はまず使われない。敬語使用が不要と考えられる相手に対しては「ちょっと聞きたいんだ(です)が」「ちょっと(ものを)尋ねたいんだ(です)が」その他の希望表現を使うことはある。「ちょっとすみませんが」は広く使われる。これらの文末の「が」は④③④で述べたことと同じく、後続の文への導入の役割を果たし、省略すると切り口上の感じを強くする(30巻 3.2.参照)。法輪寺(ほうりんじ)は嵐山にある寺の名(4月13日に、13歳の少年少女が着かざってお参りする「十三まいり」は名高い)。「ホーリンジ」という発音が正確に聞きとれるか否かにも注意。「～へはどう行ったらいいのでしょうか」は道をきくときの固定的な表現として覚えさせたい。「～ののでしょうか」の「の」は、説明を求める意が含まれているが、この場合は、なくてもよい。「～はどこですか」しか知らない学習者には「どう行ったらいい(の)でしょうか」「どう行けばいい(の)でしょうか」という表現も練習したい。「～へは」という助詞の重なりも練習したい。

⑤④「ああ、法輪寺でしたら」の「～でしたら」は条件形を使ってはいいるが、話題(相手の提出した主題)の反復的(確認的)提示。常に相手のことをばを受けて反復的に用い「あなたの話題にしている～は」とほとんど同じ。「法輪寺なら」と「なら」も使える。「なら」よりも「でしたら」のほうが改まり度は高い。「右に曲がるとすぐ左にあります」は「～と、～にあります」の文型として道筋を教える言い方として覚えさせたい。この場合の「～と」は既定条件を表すもの、または、発見の「と」と呼ばれる。(第22巻「あそこへのぼるとうみがみえます」参照。)
「すぐ左」という言い方は、「すぐ」という副詞がある限られた範囲で名詞を修飾することのある例である。「すぐ左／右／前／うしろ／先／そこ／隣り」など。「ちょっと」も似た働きを持つが被修飾名詞に差異がある。

⑤⑤は③②③②と同じ。⑤⑥は⑩参照。

旅行者のおじぎに対して、清や恵美子もおじぎを返している。清のおじぎは「どういたしまして」「いいえ」などの代りと考えてよい。

VI 庭園の前で (⑤⑦～⑥⑩)

川の流れに重なって庭園が現れ、母・恵美子・清の3人が見物している。ここは南禅寺（なんぜんじ）という寺の庭。南禅寺は京都東部にある禅宗の寺院で京都五山のひとつ。この庭園の様式は枯山水（かれさんすい）と呼ばれる。人工庭園の様式のひとつで、石や刈り込みを配し、白砂を敷きつめ、山や川や海等の景色を表現するもの。砂には水の流れ（波）を表す跡がつけられている。足跡をつけてはいけない。赤く咲いている花はあじさい。

母 「⑤⑦けっこうなお庭ね。」

恵美子「⑤⑧ええ。」

清 「⑤⑨そろそろ行きましょうか。」

母 「⑥⑩はい。」

⑤⑦「けっこうなお庭ね」の「けっこうな」は「すばらしい／うつくしい／気に入った／満足するに足る」などの意を表す形容動詞。「お庭」の「お」は美化語化用法と考えるのが適当だろう。芸術品としての庭園に敬意を表しているにとるよりも、女性の多用する「お」と解したい。同様な場面で男性が「お庭」ということはほとんどない。「おうち」「お花」なども同じ。「お庭ね」の「ね」は「ネー」と強く発音されている。感嘆と同意を求める気持の両方の強調を表す。「名詞+ね」も女性の特徴で、男性なら「庭だ／です」ね」と助動詞が落ちないのがふつう。⑫⑮参照。

⑤⑧「ええ」はかなり長めに強調的に発音されている。母の感想に対する強い賛意を表す。この場合「はい」と言えば、単に相手の言ったことを了解したことになるやすく、冷たい感じを伴う。

⑤⑨「そろそろ行きましょうか」の「そろそろ」（副詞）は、自・他の行動・状態にとって「（物理的にも心理的にも）許される時間の限度が近づいてい

るので、同一の状態をこれ以上つづけることを避けて、次の行動に移るほうがいいだろう」という判断を表すことば。

⑥①の「はい」については、これまで何回か触れた「はい」と「ええ」を参照されたい。「はい」と「ええ」との丁寧度の違いを基本に考えると、言語行動の違い、微妙な意味の違いが分かりやすくなってくる。

VII 山門を背にして (⑥①～⑥③)

庭園を出た3人は、南禅寺の大きな山門を背にして歩きながら、昼食の相談をする。

清 「⑥①お母さん、お昼にしましょうか。」

母 「⑥②そうですね。」

恵美子「⑥③あら、こんな時間だわ。」

清 「⑥④(恵美子に)何にしようか。」

恵美子「⑥⑤そうね。」

⑥⑥母は、おとうふが好きよ。」

清 「⑥⑦(母に)おとうふがお好きなんですか。」

母 「⑥⑧ええ。」

⑥①の「お昼にする」は、「昼ごはんを食べることにする」の意。「食事名+にする」という言い方を覚えさせる。「朝食／朝ごはん／朝はん」「昼食／昼ごはん／お昼／お昼ごはん」「夕食／夕ごはん／夕はん」などの語の多様性も教えたい。「食事」のことを「ごはん」と言うことも。朝食・昼食・夕食のうち「お」が使われやすいのは「お昼(ごはん)」ぐらいで、「お夕はん」も使うが、少ない。「ご朝食／ご昼食／ご夕食」も使わないことはないが、書きことばがふつう。なお、「お昼」は「正午」の意味でも使われるので注意。「お茶／おやつ／……にする」も扱いたい。「～ましょうか」は勧誘を含む提案の表現。

⑥②「そうですね」は、同意することを表す。アクセントとイントネーショ

ン「ソーデスネ／」に留意したい。

㉔「あら、こんな時間だわ」の「あら」は、男性が使うことは少なく女性に多い。「こんな」(連体詞)は「このような」の口語表現であると同時に、話者の驚き(意外の感)を表すことができる。この場面では「このような」は使えない。「そのような／あのような／どのような」も同じで、これらは客観的叙述表現に適し、「こんな／そんな／あんな／どんな」は主観的・感情的表現に適している。「～時間だわ」は女性専用。「名詞+だ+わ」であるが、「名詞+わ」という言い方はないので、「だわ」を一語のように扱ってさしつかえない。男性なら「こんな時間だ(よ)」となりやすい。「あら、こんな時間だ」なら男女共に使う可能性はある。女性の「時間だわ」と「時間よ」とを比べれば、前者は自らに対する確認・断定の感が強く、後者は他者に対する伝達の意図を持つ。

㉕「何にしようか」については、まず、丁寧さのうえで、母に対する㉔の「お昼にしましょうか」と対比する。「お昼にしましょうか」は食事をとるかどうかの提案であったが、「何にする」はくお昼の中味を何にするか>という質問文となる。「(昼食として)何を食べるか／何を選ぶか」などの意であることを確認させる。「する」は他の動詞(や述語)の代用の機能を持っているので「～にする」も応用範囲は広い。

㉖の「そうね」は、清の質問に対して<自分もいっしょに考える>を含意する。男性なら「そうだね」となりやすい。㉔を参照。

㉗の「母は」はく夫>に対して自分の母親を呼んだものだが、義理ではあっても共に母であるから、ここで「お母さん」と言っても不自然ではない。どちらを選ぶかはその時の状況や個人差によるが、「お母さん」のほうが多いだろうと思われる。身内を身内に言うときは上下関係が強く働くからである。ここでは、身内ではあるが、母を第三者として扱い、その代弁の形をとっているからだと思われる。「おとうふ」の「お」は美化語用法。男性より女性が多用する。「好きよ」は女性専用。「形容動詞の語幹+よ」の用法。男性なら「好きだよ」となる。(㉕㉖参照。

㉞の清の言う「おとうふ」は、ふだんの生活で男性が使うことはむしろ少ないと思われる。本書では美化語扱いとしている。しかし、男性であっても、かなり遠慮のいる相手・場面では、ふだん使わなくともこの「お～」は出ることがある。これはむしろ尊敬語意識に近く、「あなたさまが召しあがる(食べ物)」の意や自らのことば遣いを丁重にしたい意識とがないまぜになって、「お」に具現されるものだと考えられる。「お」の面倒くささの一例である。なお、周囲に「おとうふ」と言う人が多ければ、いつの間にかその影響を受けているということも見落してはならない観点である。この清の場合は、恵美子が「おとうふ」と言っていることと、義母に対する清の丁寧意識とが「おとうふ」と言わせたと考えられる。「お好き」は尊敬語の「お」で、「お母さんが(好きだ)」の意。「お～です／なんです」の型として、㉟の「お疲れじゃありませんか」と共に再確認させる。

VIII 湯どうふ屋で(㉞～㉟)

この場面は、言語表現からみると3つに下位区分できる。店員に対する湯どうふの注文の部分、料理の出るのを待つ間にする午後の相談の部分、湯どうふを食べ始める部分の3つである。

湯どうふは日本の伝統的料理のひとつで、とうふを湯で煮て、つけ汁や薬味で食べる。目の前でゆでながら食べるのが特徴。とうふ料理は寺院の精進料理の伝統を持つと言われ、必ずしも一般的料理ではない。

VIII-1 湯どうふ屋に入る(セリフなし)

3人は「ゆどうふ」と書かれた看板の出ている和風の建物の門に入る。着物にもんぺ、前掛け、ぞうり姿の女店員に案内され、小鳥のさえずりが聞こえる新緑の木の下を通り、ゆどうふを食べる台に座る。

VIII-2 湯どうふを注文する(㉞～㉟)

屋外の台に座り、注文する。

店員 「⑥⑨どうぞ、こちらの方へ。

⑦⑩何になさいますか。」

清 「⑦⑪何をめしあがりますか。」

母 「⑦⑫そうですね。

⑦⑬湯どうふをいただきます。」

恵美子「⑦⑭じゃあ、わたしも。」

清 「⑦⑮湯どうふを3つください。」

恵美子「⑦⑯あっ、冷たいお茶をいただけませんか。」

店員 「⑦⑰はい、かしこまりました。

⑦⑱すぐお持ちいたします。」

⑥⑨の「どうぞ、こちらの方へ」は、④②の「どうぞ、こちらへ」と対比する。いずれも基本的には方角を指すが、この場合のように眼前の場所そのものをも指示しうる。話者が眼前の場所を示して「こちらの方へ」というのは、たんに「こちらへ」という場合よりも改まった場合であるのが一般的である。「方」のもつあいまいさの利用である。

⑦⑩「何になさいますか」は「何にするか」の尊敬語用法（する→なさる）。この場合は「何を注文するか」の意。⑥⑪⑥⑫とも対照されたい。

⑦⑪「何をめしあがりますか」は「何を食べるか」の尊敬語用法（食べる／飲む→めしあがる）。「あがる」も「飲食する」の尊敬語として使われるが、「おあがりになる／くださる」の形で使うことが多い。なお「おめしあがりになります／ください」という人がよくあるが、二重敬語となり好ましくない（3.2.参照）。ここで「めしあがる」に対応する謙譲語は「いただく」（⑦⑬）であることを確認させるのもよい。清が母に対して「めしあがる」を使うのは丁寧すぎると感ずる人もあるかもしれない。

⑦⑫の「そうですね」は、⑥⑤の「そうね」とは丁寧さの違いがあるだけだが、⑥②の「そうですね」（賛意）とは違い、質問に対してほとんど反射的に出てくることばで、多くの場合、多少の遠慮を示すために相手の質問に間髪を入

れずに希望（結論）を述べるのをさしひかえ、一瞬の間をおく役目も果たしている一種の応答詞として考えてよい。

㉔の「湯どうふをいただきます」の「いただく」は、㉑の「何をめしあがりますか」に対応するものだから「食べる」の謙譲語としてよいだろう。「もらう」（受けとる）の謙譲語と考えてもよいが、こうした飲食の場面では「食べる」と「もらう」とはほとんど同義に使われやすい。なお、「いただく」は、特に飲食の場合、「あなたもいただく？」のような使い方が広まっており、美化語化（丁重語化）しつつあるとも言われるが、学習者には避けるように指導したい。つけ加えれば、「お湯」「おとうふ」があっても、「お湯どうふ」とは言わない。学習者の疑問はこんなところにもある。

㉕「湯どうふを3つください」の「3つ」は、三人前（分）の意。「ひとつ、ふたつ、……」という数え方は、他の助数詞（主として無生物の場合）の代用をする傾向がつよい。

㉖「あつ、冷たいお茶をいただけませんか」の「あつ」は、突然何かに気がついたことを表す。「お茶」の「お」は代表的な美化語化用法。男女共に使い、かなり固定的。現在「茶」とだけ言う人はきわめて少ない。「いただけませんか」については、㉔で触れたように、可能形を使った否定疑問は習得しにくいので注意する。

「冷たいお茶」に関連して言えば、日本のレストランでは、食事の前に水かお茶を無料で出す習慣があることを教えてもいいだろう。しかし、お茶は熱いものを出すのがふつうであるから、この場合の「冷たいお茶」は、湯どうふ屋の特例と考えてよい。（夏に好まれる冷たいお茶は、ふつう麦茶である。）恵美子は湯どうふ屋に冷たいお茶があることを知っていたのであろう。

上記の㉕㉖で清・恵美子という客が店員に対してかなり丁寧な物言いをしていることを奇異に思う学習者も多いかもしれない。自国の習慣がどうであっても、日本人のこの丁寧さが教育上の作意的なものではないことは理解させたい。むろん個人差はあり、「もらえませんか」と言うこともある。

㉗「はい、かしこまりました」は、店員が客の用件を了承したの意。「か

しこまる」の語義は、畏れ慎しむの意（謙讓語）であるが、丁寧なあいさつ語として単純に扱いたい。遠慮のいる人間関係や改まった場面では男女を問わず多用される。社交上、接客上の基本用語でもある。「わかりました」でもよいかという質問があるかもしれないが、客の注文を＜受諾＞したというような場面ではそぐわないと指導する。「承知しました／いたしました」ならよいが、「かしこまりました」よりは事務的な感じがする。

㉞「すぐお持ちいたします」は「お～いたす」という謙讓語化の類型表現。㉜参照。この場合は「持ってくる」の意。「すぐ持ってまいります」とも言える。

VIII-3 午後の相談について（㉞～㉟）

注文の料理がくるまでの間に、午後の相談をする。

恵美子「㉞午後は、どこへ行きましようか。」

母 「㉟そうね。

㉟清水寺は、どう？」

恵美子「㉟うん。」

㉞の「午後は、どこへ行きましようか」という恵美子のセリフは、画面では、直接には母に向けられているが、清も聞いているので、むしろ2人に向けられたことばと解するほうがよいだろう。清と母は丁寧な物言いをしているので、この2人に対して恵美子も「～ましようか」という丁寧表現をしたと見たい。恵美子は母だけに対するときは丁寧語を使っていない。後出㉟も、2人に向けられたものと考えられる。

㉟「そうね」については㉜㉝㉞をそれぞれ参照されたい。

㉟「清水寺は、どう？」の「～は、どう？」は、提案の言い方。自分の意志・希望を表明して、相手の判断をあおぐ表現。「～について、あなたはどうか」の意。丁寧には「～は、どうですか」、さらに丁寧には「～は、いかがですか」となる。相手に物事を勧める意味でもある。清水寺（きよみ

ずでら)については、場面Xを参照。

㉔の恵美子の「うん」は返事というよりは納得・了承のあいづちに近く、母に対する親しさを示している。㉕では清が恵美子に対して「うん」と言っている。親子の関係では上下の区別なく使われやすい。学習者には、ごく親しい友人や身内以外に使うと失敗を犯しやすいと注意する。「はい」や「ええ」のぞんざいな言い方であると同時に、文体的には「だ」の体(普通体)レベルのことばであるから、「だ」の体が使える相手以外には使えないものとして扱うのがよい。

VIII-4 注文した料理がくる(㉖～㉘)

3人が午後の相談をしているときに、店員が注文の湯どうふ料理のセットを持ってきて配膳する。膳の内容や、店員の配膳のしかたにも注意させる。チョコレート色に見えるのはごまどうふ。おしぼり、わりばし、土なべ、土びん、なべしきなども見える。興味に応じて解説するのもよい。

店員 「㉖お待たせいたしました。」

(配膳が終って)

店員 「㉗どうぞ、ごゆっくり。」

清 「㉘さあ、どうぞ。」

母 「㉙はい、いただきます。」

㉖「お待たせいたしました」は「お～いたす」という謙譲語の形をとり、待たせたことに対する詫びの意を含んでいるが、むしろ、エチケットとしての慣用的なあいさつ語。店員の客に対する場合、事務的な会話、電話、駅のアナウンス、開会のあいさつなど、そう長く待たせていなくてもよく用いられる。詫びの意をはっきり出すときは「お待たせしてすみません／申しわけございません」などが用いられる。

㉗「どうぞ、ごゆっくり」は、このような店の場合だけでなく、一般に客に対してくつろいでほしいという意を表すことばとして、慣用句的に用いら

れる。客が帰るのを引き止めたいときにも用いられる。「ごゆっくり」の「ご」（尊敬語用法）は、「ゆっくり」という和語（副詞）につく場合の数少ない例のひとつ。「ごもっとも」ほか。

㉔「さあ、どうぞ」の「さあ」（感動詞）は文脈により多義的だが、ここでは、人にものをすすめ、その人がすすめられた行動にできるだけ早く出るようにしむけることば。＜遠慮しないで＞の意でもある。「さあ、どうぞ、めしあがってください」のつもり。

㉕「はい、いただきます」の「いただきます」は、この場合「言われた通りに、私は食べる」の意と、日本人の習慣として使われる飲食を始める前のあいさつ語の用法とが融合していると見たい。あいさつ語については、人といっしょに食事をするときは、だまって食べはじめるのは無作法と考えられている（そういう文化である）ことを説明したい。また、客はふつうホスト／ホステスにすすめられてから箸をつけることも。食後の「ごちそうさま（でした）」「いただきました」なども対として教えたい。その場合のテンスに注意。

IX 清水寺へ向かう坂道で（㉔～㉕）

湯どうふ屋での食事のあと、清水寺（きよみずでら）に向かう。清水寺は京都東部の小高い山にある寺院（X参照）。清水焼と呼ばれる焼き物は有名で、寺院に通ずる坂道の両側に立ち並んでいるみやげ物屋では、この清水焼をたくさん売っている。焼き物の専門店とみられるみやげ物屋で買い物が行われる。女店員（女主人？）は着物に、白いかっぱう着姿で出てくる。

IX-1 焼き物屋を見つけて（㉔～㉕）

坂道の店で母が焼き物を見つけて、2人に声をかける。

母 「㉔あつ、ちょっと。」

母 「㉕すみません（奥の方へ声をかける）。」

店員 「㉔いらっしゃいませ。」

母 「㉔これとそれを見せてください。」

店員 「㉕はい、かしこまりました。」

㉔の「あっ、ちょっと」は、何かに気がついて、相手呼びとめたり、注意をひかせたりする呼びかけ語。「ちょっと待って／見て／来て／……！」などの短縮形と考えてもよい。知らない人に呼びかける場合もある。改まった場面では使いにくく、その場合は「(すみませんが／恐れいりますが) ちょっと～てくださいますか」のような完全文となる。

㉕の「すみません」は画面で見るとおり、ここでは、呼びかけを目的とするあいさつ語としての用法。店の人を呼び出したり、あるいは呼びとめたり、知らない人に声をかけたりするときに用いられる。一般的な詫びや感謝と混同しないこと。店員を呼び出すには「お願いします」もよく用いられる。一般の家庭を訪問するときは「ごめんください」が多い。

㉖「いらっしゃいませ」は客の歓迎を表すあいさつ語。店員と客の関係ではもっとも一般的である。一般の家庭でも来客に用いられるが、店とちがい、その来客が未知の人で、予告もない来訪のときはふつうは使わない。歓迎とは心を開くことだからである。「～ませ」「ます」の命令形から終助詞化したもの）は省略できるが、あるほうが丁寧で、男女とも用いるが、女性のほうが多い。ただし、「ませ」はあいさつ語以外ではしだいに使われなくなってきている。

IX—2 湯のみを買う (㉔～㉖)

店員が客の要求で品物を出す。母は恵美子にもプレゼントとして買い与える。

店員 「㉔どうぞ、ご覧ください。」

恵美子 「㉕すてきね。」

㉖わたしも、こんなのがほしいわ。」

母 「㉗じゃあ、買ってあげるわ。」

恵美子 「㉘わあ、ありがとう。」

⑫の「ご覧ください」については、⑬の「ご覧いただけますか」で述べた「ご覧」を参照されたい。「ご覧になってください」の「になって」を省いた形としてもいいだろう。学習者には「お／ご～なさい」（お読みなさい／ご覧なさい、など）との違いに注意させる。「～なさい」のほうは純然たる命令であるから上位者には使えないが、「～ください」のほうは、形は命令形でも、依頼・願望の表現となる(②⑨参照)。客の要求に対する返事としての「どうぞ、ご覧ください」などは、むしろ、すすめや許容と言ったほうがよいだろう。

⑭「すてきね」は、ほぼ女性専用。「形容動詞語幹+ね」については、類似的表現として⑮に「元気よ」がある。助動詞とされている⑫の「(元気)そうね」も同じ。男性なら「すてきだね」となろうが、「すてき(だ)」ということば自体男性に向かないという意見もある。

⑯の「こんなのが」の「こんな」については、⑰の「あら、こんな時間だわ」を参照。あえて付け加えれば、⑱が期待外を表しているのに対し、⑲では期待どおりを表している。「ほしいわ」の「わ」も用言の終止形に自由につく女性専用の終助詞。「ね」が相手に同意を求めたり、事がらの真偽について相手に確かめたりするのが中心的な用法であるのに対して、「わ」は自分の意志・主張・判断などを相手に納得させたり、自らに言い聞かせたり、感動した気持ちなどを表わすのが主たる用法である。「わ」のほうが主観的・自己中心的といえるので、上位者に対してや改まった場面で多用すると、かえってぞんざいな感じを与える。これに相当する男性の終助詞は「よ」または「な」であろうか。一般的に言って、終助詞は、文が丁寧化するのに反比例して使われる度合いが少なくなる。その逆も真である。

⑳「じゃあ、買ってあげるわ」の「じゃあ」は「では」の口語的表現。「じゃ」と短くいうこともある。「買ってあげる」は、母から娘への表現であるが、不自然でも誤用でもない。現在では、「～てやる」は女性ほとんど使わなくなっている。男性も次第に多用する傾向にある。「あげる」の謙譲語としての性質は失われつつあり、単なる美化語、ないし、丁寧さのニュ

ートラルな語に変質しつつあると見たほうがよい。与え手・受け手が人間同志の場合は特にそうである。したがって、謙譲語的性質は「さしあげる」にその席をゆずってきている。27巻「にもつを もってもらいました」参照。

⑨⑥「わあ、ありがとう」の「わあ」は、驚き、喜びなど、意外なときに思わず出る声（感動詞）。うちとけた雰囲気が出やすく、あとに続く文もインフォーマルな言い方が一般的。

IX—3 お金を払う（⑨⑦～⑨⑩）

大きめの湯のみ茶わんを2個買うことに決め、紙に包んでもらい、代金を渡す。

母 「⑨⑦これを別々に包んでください。」

店員「⑨⑧はい、かしこまりました。」

母 「⑨⑨おいくらですか。」

店員「⑨⑩1万円いただきます。」

母 「⑨⑪はい。（お金を渡す）」

店員「⑨⑫ありがとうございます。」

⑨⑦の「別々に」は、物あるいは人について、2つ（2人）以上のものを1つ1つ（1人1人）に分けての意。

⑨⑧「かしこまりました」はこの映画で3度目。⑦⑦⑨①参照。

⑨⑨「おいくらですか」の「おいくら」は美化語用法。「いくらですか」でもよいが、「お」をつけて物言いを上品にしようとする人は多い。特に女性に多い。なお「いくら」は、値段のほか、時間・分量などにも使えるが、「お」がつくのは値段を聞く場合だけである。「いくら」自体は副詞として「いくら～ても／でも」の用法もある。なお、分量・程度などが少ないことを表す「いくらか」とは混同しないこと。

⑨⑩の「1万円いただきます」は、「1万円です」と同義で、商売の際の慣用的表現として扱うのがよい。こちらが受けとるのは1万円だの意味で、形式

は丁寧ではあるが、謙譲語意識はそれほどないと考えられる。その意味では美化語化（丁寧語化）が強い。また、客に対して、値段がすでに決まっているものについては、「1万円ください」とは、ふつうは言わないこともつけ加えていいだろう。また、「1万円いただきます」と言えば、値引きなどで、その場で急に決めた値段になる恐れがつよい。

この値段のやりとりで、客も店員も、茶わん1つ1つの値段を確かめないのは、奇異な感じを与えることも否めない。

㊦の「はい」は金を差し出しながらの「はい」で、「どうぞ」とほぼ同じ用法である。店員は金を受け取るとき、両手で受け取っている。学習者はどんな印象を持つであろうか。客に対する敬意であり、お金を大切にすることの表われであると日本人なら解釈するが。

㊧の「ありがとうございます」は金を受け取るときのあいさつだから現在形が使われているが、客が帰るとき、つまり買物という行為が完了したときなら、「ありがとうございました」という完了形が使われるであろう。とはいえ、このような場合の「～ます」と「～ました」の使い分けは、話し手の置かれた立場からみた状況一般の認識——客が来る、そして帰るということ——を習慣的にとらえるか、臨時的にとらえるかなど——に深くかかわっているので、簡単には断言できない。

X 清水寺で（㊦～㊧）

清水寺（きよみずでら）の境内と本堂が映る。中学生か高校生らしい修学旅行の団もいる。制服を着て旗を持つバスガイド（女性）も映る。

清水寺は805年の建立。京都市東山にある。背後の山によせて堂や塔が調和よく配置され、四季・晴雨いつでも美しいとされる。特にこの映画で見られる懸崖に臨んだ本堂の舞台は有名で、舞台を支える巨木の組み合わせはたくましく、懸崖づくりと呼ばれている。この舞台からの眺めはすばらしい。下を見ると非常に高いので、大きな決心をするたえとして「清水の舞台から飛び下りよう」という。遠くに見える山脈は、場面Ⅴに出てくる嵐山方

面の山々である。

恵美子「㉔向こうへ行ってみましょうよ。

㉔ねっ。」

㉔の恵美子のことは遣いが丁寧体になっているのは、母・清の2人に向けられたからだと考えてよく、㉔でも触れたが、母・清がかなり丁寧なことは遣いをしていることへの対応と、相手に多少とも遠慮のある限り「～てみようよ」というインフォーマルな表現は成人の女性としては使いにくいことの2つがこの表現を選ばせたと判断したい。また、終助詞「よ」は、話し手の意志・判断・感情などを相手に強く訴える性質があり、男女ともに用いるが、「ましょうよ」という形になると、女性的ひびきが強くなる。

㉔の「ねっ」は「ね」を強く短く発音したもの。「ね」は相手に同意を求めるのが中心的な用法であるから、「ねっ」と強めることによって、その同意をいっそう強く求めていることになる。こうした強い「ねっ」は、ふつう遠慮のいる間柄では使えない——敬意表現とは共存しにくい——から、ここでは、母や夫に対するある種の甘えの気持ちや心楽しさを表しているとも見ていいだろう。

3. この映画の学習項目の整理

この映画のサブタイトルの「待遇表現」を忠実に整理しようとするれば、問題はあまりにも広くなる。「待遇表現」は日本語の中の一部の問題ではないからである。そこで、この映画（次の第30巻も含めて）の主要な目的である「敬語」ないし「敬意表現」に的をしぼり、知っていると便利なこと、および学習者が困惑を感じずであろうと思われる事項について概説する。とはいえ、これも欲をいえば切りがないので、この映画の利用者が自ら学習項目を整理するときの手助けとなるようなことについてごく基本的なことを取り上げることにする。それも一部にしか言及できないが、この29巻では、主に

「敬語形式」を扱い、次の30巻で「敬語行動」を扱うことにする。いくつかの点で、2.2.ですでに述べたことと重複することがある。

3.1. 待遇表現と敬語

「待遇表現」は、そんなに簡単に定義できるものではない。また、「待遇表現」という用語自体が一般的であるとは決していえない。外国語に訳すこともむずかしい。ここでは一応「話し手と聞き手と第三者との社会的・心理的關係に基づいて、話し手が選ぶ言語形式と言語行動」ということにしておく。

このように定義すると、少なくとも日常の話しことばのすべてが入ってきてしまうことは否めない。相手を丁寧に扱うばかりが「待遇」ではないから、普通の表現も、ぞんざいな表現も、親愛の表現もすべて入ってくる。そこで、相手を丁寧に扱う表現にかりに「敬語」ということばを当てはめれば、上の定義はそのまま「敬語」の定義にも使える。「言語形式」を「敬語形式」に、「言語行動」を「敬語行動」に改めればよい。「形式」は頭の中に（あるいは辞書の中に）あることばの形そのものを指し、「行動」はその形式を、いつ、どこで、どのように使うかを指す。上のことを整理すれば次のようになる。

待遇表現	{	丁寧な表現……………+
		普通の表現……………0
		ぞんざいな表現…………—

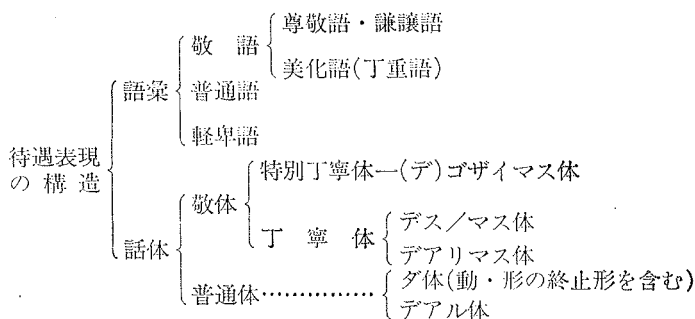
+・0・—は、「丁寧さ」を基準にしたかきの記号である。むろん、あらゆる表現がこの3種にきれいに分けられるわけではなく、切れ目なく連続しているわけであるから、区分は分かりやすさのための目安である。大抵の学習者は、入門期からこれまで、「です」「ます」「ください」その他、わずかな形式に依存して、上記のゼロ・レベルよりほんの少しプラス・レベルに近づいた表現の形式を学んできたわけである。そうした学習者にとっては、この映画によって一挙にプラス・レベルの表現——といってもその基本——の

獲得を目指すことになる。

プラス・レベルの表現（丁寧な表現）を構成する大事な要素が狭義の「敬語」である。成人の社会生活にとっては、この丁寧な表現は欠かせないものであるから、自ずと要素となる「敬語」の習得が要求され、「敬語」を使った表現は待遇表現の代表と見なされるようになる。ここで大切なことは、丁寧な表現は、普通の表現やぞんざいな表現と相補的に存在していることである。言いかえれば、普通の表現やぞんざいな表現があつてこそその丁寧な表現である。語彙的にみれば、普通語や軽卑語あつての「敬語」である。つまり一方を選べば他方は選ばれない。

- [2] $\left\{ \begin{array}{l} + \\ \uparrow \\ 0 \\ \downarrow \\ - \end{array} \right.$ あの方も明日いらっしゃるそうです。
あの人もした来るそうだ。
あいつもあした来やがるってよ。

これは一例であり、いろいろなヴァリエーションがありうる。また、敬語は単に語彙の問題ではない。語彙の違いは文法の違いを含んでいる。ところで、日本語の〈文〉は、事柄を表す部分とそれを送りとどける先を表す部分（話し手の態度を表す部分）とがかなりはっきりしていると見ていいから、〈語彙＋話体（文末形式）〉のような形でとらえることができる。したがって、待遇表現を文の構成要素の観点から図示すれば、次のようになる。



2.2. の敬語の分類であげた伝統的命名の「丁寧語」は、上図では、伝達先（丁寧さ）明示の機能を重んじて＜話体＞（文体、話調ともいう）に組み入れられる。ひとつ注意していただきたいのは、上図の「ダ体」用法には動詞・形容詞のいわゆる終止形（辞書形）が含まれることである。したがって「何ておっしゃるの」の「おっしゃる」は「敬語のダ体（普通体）」という扱いになる。聞き手が限定されるからである（3.3. 参照）。こうした扱いをすると、上図の「語彙」は厳密には「形態素」ということになる（ただし、これは教育上の扱いを言っているのではなく、分析的なことを言っているのであるから、学習者にそのまま提出するようなことは控えるほうがよい）。大切なのは「文末形式」であり、日本語の＜文＞は、省略がない限り、上記5種の話体から逃れられないことを示している。学習者は目にし耳にする＜話体＞が既習のデス・マス体以外であるとき、それらが何を意味するか、日本語のどこに位置づけられるか、正しくは分からないのであるから、その位置付けをしておくことは、学習上の不安を解消するには役立つはずである。この映画では、「デス・マス体」と「ダ体」の用法が中心となっている。同一の相手に対しては、話体の混用は原則的に許されないことであるから、＜2種の話体＞が使われていることは、＜2種の人間関係＞が要求されているのだ、というふうに理解させたいものである。30巻で扱う「ソト・ウチ」や「上・下」の人間関係の違いである。学習者がだれに対しても「デス・マス体」しか使わない（使えない）ということは、日本人の人間関係を無視しているという理屈になる。「デアル」「デアリマス」は、主として書きことばに使われるものなので、ここでは言及しないことにする。

3.2. 敬語の形式

敬語の「分類」については、意味・用法上大きな問題があるが、この映画での取り扱いは2.2.2 (3) で述べたし、多くの研究文献があるので、ここでは省略する。他書と違う扱い方をしたもののがひとつだけあるが、それは「こちら／そちら／……」や「どうぞ」「少々」など「改まり語」とでも名づけたい

語を、それが使われる文のレベルから見て「美化語（丁寧語）」の中に含めたことである。取り扱いの利用者の自由に任される。

ここでは、多種多様で一見複雑に見える敬語を、その形式の共通性という観点から整理しておく。次の2種4類に整理される。

I 交替形式（形がすっかり変わるもの）

（言う）→おっしゃる／申す，（する）→なさる／いたす，（見る）→ご覧／拝見，……

II 付加形式（接辞を付すもの）

1. 接辞＋語

お／おん／ご～，貴～，小～，拙～，……

2. 語＋接辞

～さん／さま，～れる／られる，……

3. 接辞＋語＋接辞

お～さん，お／ご～になる，お／ご～する，……

どのような敬語も小単位としては上記のいずれかに属する。尊敬・謙譲…のような意味上の区別ではないから、運用に当たっては形式の区別と意味の区別をはっきりさせる必要がある。接辞は、歴史的には「お み おつけ」「ご 芳 名」のように重なっていることもあるが、上のように整理した型はこれ以上重ねないのが原則である。交替形式は、ひとつひとつ覚えなければならないものであるが、数はそんなに多くない。付加形式はいわばニュートラルな語を敬語化するもので数が多く、用法も複雑で、学習者を悩ませる。特にIIの3がそうである。この3は「お／ご～くださる／いただく」「お／ご～申し上げる／願う」などのように類型的で動詞用法が多く、この形式をマスターするか否かは、敬語能力の増大に大きくかわかる。この型は、個定的なものとして、しっかりおぼえさせる必要がある。「（書い）てくださる」はあっても「お（書い）てくださる」はない、というように。なお、交替形式の語を付加形式の語としてしまうものが「お召し上がりになる」や「お帰りにられる」のような二重敬語である。ただちに誤用とは言えないが、指

導上は誤用として扱いたい。敬語といえども、使いなれた形式は敬意が足りないような気がして、もう一度敬語化する傾向（危険）をはらんでいる。

また、人間の動作・状態を表す中立的な「語」ならすべて敬語化できるというわけではない。「語」の意味的・文法的性質（音形を含む）により、敬語化が不可能であったり、尊敬語にはなるが、謙譲語にはならなかったりする。たとえば「お帰りになる」は可能だが、「お帰りする」は不可能である。連用形が一音節の語も「お～になる」「お～する」という敬語にはならない。

- 〔3〕 $\left\{ \begin{array}{l} \text{見る} \rightarrow \times \text{お見になる（ご覧になる）} \\ \text{寝る} \rightarrow \times \text{お寝になる（お休みになる）} \end{array} \right.$

その他「いる」「来る」「する」などもそうである。こうしたものは交替形式を持っていることが多い。「する」については「早くおし!」という形はある。初級ではあまり問題にならないが、複合動詞（「書き始める」など）や慣用句的な連語（「気をつける／気がつく」など）の敬語化はしばしば日本人をも困惑させる（30巻㊟参照）。敬語化されることによって、上記の類型と区別がつきにくくなり、誤解のもとになるものもある（「ごいっしょする」「お力になる」など）。型をしっかりおぼえさせると同時に、流動的なものの、慣用的なものとの区別をする必要もある。

3.3. ダの体、デス・マスの体とその文法性

日本語の文は、名詞文・形容詞文・動詞文のすべてが、3.1で図示した5種の文末形のいずれかを義務的に要求する。この5種の意味・用法については、くわしく説かなければならないはずのものであるが——デアル・デアリマスが出てくると特にそうであるが——紙幅の都合で割愛する（参考文献にあげた、三尾砂『話ことばの文法』を参照されたい）。

学習者は、おそらく、ここまでの段階においてもすでに、デス・マスの体とダの体との丁寧さのレベルや対人関係における用法の違いはある程度知っているものと思われる。それを前提にして、ここでは文法的性質について簡単に整理しておく。この映画で、デス・マスの体を使わず、ダの体を使っ

ている人間関係は清と恵美子、母と恵美子という身内の関係だけである。たとえば、

㉔これ、たのむよ。(清→恵美子)

㉕じゃあ、買ってあげるわ。(母→恵美子)

30巻ではさらに次のような例がある。

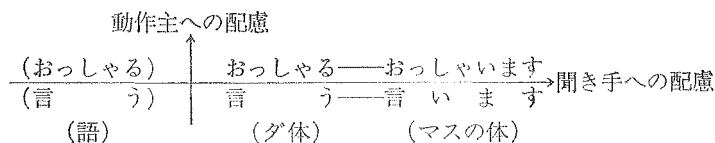
㉖木村先生は、何のご研究をなさっているの。(恵美子→清)

㉗先生はね、こういう古いかわらにおくわしい方なんだよ。(清→恵美子)

㉔には狭義の敬語要素はないが、㉕の「～てあげる」や、㉖の「～なさっている」は敬語を使っている。しかし、「ます」は使われていない。この㉕㉖㉗に関して学習者はしばしば疑問を抱く。いわゆる敬語を使うときは「です」や「ます」の形にしなければいけないものと思いこんでいる傾向が強い。これは、ほぼ「～です／ます」の文ばかりで習ってきたことと、実際に練習する相手（聞き手）が「です」や「ます」を使わなければならない相手（主に先生）であったからである。教育上の実用性（安全性）というプラスの面と同時に、待遇表現の自然さからみると相手が限られていたというマイナスの面が共存していたことになる。＜安全性＞をとるか＜自然さ＞をとるか、ということに関しては教育の効果を優先させねばならないから、一度にいくつもの形式を導入することは混乱させるばかりであり、現実の必要性から考えても「デス・マスの体」からの導入は妥当であると考えられる。

ただ、待遇表現や敬語を＜意識的＞に習う段階においては、ダの体とデス・マスの体の違いを、動作主と聞き手との区別を無視した丁寧さだけですますことはできなくなる。＜だれ＞に対して丁寧さの配慮を示すのか、動作主か聞き手か、ということである。そこで、動作主に言及する部分と聞き手に示す態度の部分とが、どのような関係になっているかを理解させる必要が起る。動詞を例にとると次のように図示できる。「名詞＋ダ／デス」の場合も同様である。

語は動作主の動作／状態等を表現する部分で、タテの関係（連合関係）をなし、文末形式「～ル／～マス」は、聞き手に対する話し手の丁寧意識を示



す部分で、ヨコの関係（統合関係）を指している。したがって、上図のタテの系列で比較すれば動作主についての、ヨコの系列で比較すれば聞き手についての取り扱いを比較することになる。つまり、タテはタテ、ヨコはヨコでしか比較できず、斜めに比較することはできない。学習者は、

- [4] { a. ○○さんがおっしゃった（よ）。
b. ○○さんが言いました（よ）。

で、どちらが丁寧かなどと質問することがあるが、別物を比較していることになり、意味をなさない。「～ます」の形は丁寧だとのみ覚えている結果である。比喩的に言えば、語彙は贈り物の中味であり、文末形はその包装紙である。けれども、中味と包装紙は現実の問題として無関係でないように、敬意の高い語が丁寧体で用いられやすいのは、聞き手への配慮が大きい力を持っているからである。それが、敬語動詞はいつも「マス」の体で用いられると思込む理由である。「○○先生がお見えになった（よ）」のような言い方は、友人どうしのあいだでもいけないと思っていることがある。学習者は高価な中味をあっさりと送り届ける方法を知らないということである。

以上のことは、動作主への言及、つまり語彙を中心に見た説明であり、逆に、聞き手中心に考えれば、語彙は文体形に引っぱられるということが言える。このことは、眼前の聞き手への配慮が動作主への配慮に優先しやすいことを意味する。敬語の用法の＜変化＞は、この聞き手（直接の相手）への気遣いが次第に大きくなり、動作（主話題の人）への配慮はしだいに弱まっていることに基づいていると言ってもいい。絶対敬語から相対敬語に移っている理由でもある。聞き手がいわゆる「ソト」であれば、ウチの上位者であっても上位者として扱わない現在の敬語の用法が、このことをよく示してい

る(30巻 3.1.参照)。こうした聞き手中心の傾向は、敬語形式の意味・用法に大きな影響を与え、敬語の分類を困難なものにしている。「いたします」「まいります」「存じます」「申します」「おります」などは謙譲語意識よりもむしろ美化語(丁重語)意識で使われることが多くなってきている。「〇〇首相は本日午前成田空港をアメリカへ向けて出発いたしました」のような使い方がラジオやテレビのアナウンサーからも聞かれる。正用か誤用かの議論が出るゆえんである(本書の扱いでは誤用となる)。上例のようなものは、文末では「ます」の形でないと使えないということに聞き手中心の強さが反映されている。

3.4. 敬意と敬語

学習者は、しばしば、＜敬語＞という語の字面にとらわれて、敬意がなければ敬語を使うのはおかしいと考えることがある。また、敬語は、封建時代の遺物だからできるだけ避けるようにしたほうがいいのではないかと、敬語は人間関係をよりよいものにする障害となっている、という意見を表明することもある。いずれも、敬語とは何かを考えさせる基本的な問題である。意見はともかく、敬語は敬意がなければ使う必要がなく、親しみを疎外するばかりだ、と考えている学習者には——友人関係や身内の関係だけで日本語を覚えた学習にはことに多い——＜敬意と敬語とは直接の関係はなく、現在はエチケットの意識で使われている＞と説明したい。これには反論があるかもしれないが、理屈よりも実情を見れば、このほうが妥当であろう。むしろ＜敬意＞とは何かということとかかわるが、2.2.2.(4)の「敬語の意味」で触れたように、日本人のことばの用法と対人関係についての礼儀作法の考えとが表裏一体をなしている、と言っていいだろう。この＜礼＞は＜敬＞とは必ずしも一致しない。かりに敬意がどんなに強くても、それを表現する言語的手段を持ち合わせていないこともある。たとえば、社交ずれた都会の子どもと、無口な田舎の子どもを対比してみれば分かるように、敬語がそのまま話し手の敬意を反映しているわけではない。＜親しみ＞を獲得したいがため

に、母語文化に照らして、丁寧表現を避けたために失敗した外国人の例はよく報告される。丁寧な言い方ばかりしていたら、＜親しみ＞を表せないことも事実であるけれども、丁寧表現を使わなくてもよい対人関係に入るまでには、学生どうしのような同一基盤に恵まれた場合を除いて、長い時間を要するのが一般である。しかも、それは個人の心理的主観だけで行動に移せるわけではなく、日本人の社会的人間関係のあり方についての価値観と一致した場合でなければならない。このことについては、30巻でもう一度触れる。

ここで、「表現」ということの問題に一言ふれておく。文法の＜論理性＞と表現の＜倫理性＞ということである。文法は間違いを犯せば意味が通じなくなるが、表現——この場合の待遇表現——は、間違いを犯せば話し手の品位を傷つけ、時により相手に害がおよぶ。待遇表現は、あるべき望ましい姿を要求している。こうした意味の待遇表現は、どの言語にも存在しているはずであるが、学習者は、母語の姿に気づかないことが意外に多い。

以上、3.1.～3.4.は敬語形式を中心としたごく基本的なことである。指導項目として、2.2.2.(3)であげた、導入・前置きの言い方や、文を中止する言い方については、30巻の学習項目の整理にゆずる。

4. 参考文献 (30巻と共通)

- 三矢 重松 1908 『高等日本文法』 明治書院
- 山田 孝雄 1924 『敬語法の研究』 宝文館
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』 紀元社
- 松尾捨治郎 1936 『国語法論改』 文学社
- 時枝 誠記 1941 『国語学原論』 岩波書店
- 三尾 砂 1942 『話言葉の文法』 帝国教育出版社 (1958 『話しことばの文法』)
- 江湖山恒明 1943 『敬語法』 三省堂
- 三宅 武郎 1944 『現代敬語法』 日本語教育振興会
- 石坂 正蔵 1944 『敬語史論考』 大八州出版
- 1969 『敬語——敬語史と現代語をつなぐもの——』 講談社
- 金田一京助 1959 『日本の敬語』 角川書店
- 山崎 久之 1963 『国語待遇表現体系の研究——近世編——』 武蔵野書院
- 辻村 敏樹 1967 『現代の敬語』 共文社
- 1968 『敬語の史的研究』 東京堂
- 渡辺 実 1971 『国語構文論』 塙書房
- 宮地 裕 1971 『文論』 明治書院 (新版, 1979)
- 大石初太郎 1971 『話しことば論』 秀英出版
- 1975 『敬語』 筑摩書房 (1966 『正しい敬語』)
- 1983 『現代敬語研究』 筑摩書房
- 伊吹 一 1971 『敬語学入門』 新典社
- 1975 『暮しの中の敬語』 笠間書院
- 奥山 益郎 1972 『日本人と敬語』 東京堂
- 1970 『あいさつ語辞典』 東京堂
- 1973 『現代敬語辞典』 東京堂
- 1976 『敬語用法辞典』 東京堂

- 1976 『現代敬語読本——人間関係のエチケット——』 ぎょう
せい
- 文 化 庁 1971 『待遇表現』（日本語教育指導参考書2） 文化庁
——— 1974 『敬語』（ことばシリーズ1） 文化庁
- 野元 菊雄 1972 『美しい敬語』 芸術生活社
- 国立国語研究所 1957 『敬語と敬語意識』 秀英出版
——— 1971 『待遇表現の実態』 秀英出版
——— 1981 『大都市の言語生活——分析編——』 三省堂
——— 1982 『企業の中の敬語』 三省堂
——— 1983 『敬語と敬語意識——岡崎における20年前との比較
——』 三省堂
- 南 不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館
- 南 不二男・林 四郎編 1973～74 『敬語講座』全10巻 明治書院
①敬語の体系, ②上代・中古の敬語, ③中世の敬語, ④近世の敬語, ⑤明
治・大正時代の敬語, ⑥現代の敬語, ⑦行動の中の敬語, ⑧世界の敬語,
⑨敬語用法辞典, ⑩敬語研究の方法
- 大石初太郎・林 四郎編 1975 『敬語の使い方』 明治書院
- 朝日小辞典 1976 『現代日本語』（柴田 武編） 朝日新聞社
- 講座国語史 5 1971 『敬語史』（辻村敏樹編） 大修館
- 岩波講座日本語 4 1977 『敬語』 岩波書店
- 論集日本語研究 9 1978 『敬語』（北原保雄編） 有精堂
- 講座日本語学 9 1981 『敬語史』 明治書院
- 角川小辞典 1982 『図説日本語』（林大監修）角川書店
- 三上 章 1955 『現代語法新説』 くろしお出版
——— 1972 『現代語法序説』 くろしお出版
——— 1970 『文法小論集』 くろしお出版
——— 1975 『三上章論文集』 くろしお出版
- 柴谷 方良 1978 『日本語の分析』 大修館

- 久野 暉 1983 『新日本文法研究』 大修館
- 牧野 成一 1978 『ことばと空間』 東海大学出版会
- 柴田 武監修 1980 『都市の敬語の社会言語学的研究——昭和53年度札幌における敬語調査報告——』（第1部・第2部）文部省特定研究「言語」総括班
- 鈴木 孝夫 1973 『ことばと文化』 岩波新書
- 井出 祥子 1976 「英語敬語の理解と翻訳」（英語文学世界11巻12号）英潮社
- 1979 『男のことば女のことば』 日経通信社
- 水谷 修 1979 『日本語の生態』 創拓社
- 直塚 玲子 1980 『欧米人が沈黙するとき』 大修館
- 国広 哲弥編 1982 『日英語比較講座第5巻——文化と社会——』 大修館
- J.V.ネウストプニー 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 大石初太郎・他 1978 『ことばの昭和史』 朝日選書
- 1983 『新しい敬語』（日本語シンポジウムIV）小学館
- 荒木 博之 1973 『日本人の行動様式』 講談社現代新書
- 1983 『敬語日本人論』 PHP研究所
- 講座日本語の表現3 1983 『話しことばの表現』（水谷 修編）筑摩書房
- 築島 謙三 1970 「話しことばにおける日本人の論理」（『日本人の性格』所収）朝倉書店
- 日本語教育学会編 1982 『日本語教育辞典』 大修館
- 国語学会編 1980 『国語学大辞典』 東京堂

<敬語等の特集（雑誌）>

- 日本語教育（日本語教育学会）：No.35（1978）「敬語と敬語指導をめぐる問題」
- 言語生活（筑摩書房）：1957.7「現代の敬語」，1961.4「正しい敬語」，

- 1965.3「敬語を使い分ける」, 1969.6「日本語の敬語はむずかしいか」,
1979.4「職場の敬語」, 1982.4「壁としての敬語」
- 国文学(学燈社): 1960.1増「敬語法の総合探求」, 1972.3増「敬語ハンドブック」, 1976.9増「あなたも敬語が正しく使える」, 1981.1増「敬語の手帖」
 - 言語(大修館): 1979.6「敬語とは何か」
 - 日本語学(明治書院): 1983.1「敬語」, 1983.7「言語行動」
 - 解釈と鑑賞(至文堂): 1967.10「敬語のとらえ方」, 1972.5増「現代の敬語とマナー」
 - 文法(明治書院): 1968.12「研究成果を文法指導に採り入れるポイント・敬語」
 - 国語学(国語学会): 1974.5「近代敬語」

Neustupný, J.V. 1978 *Post-Structural Approaches to Language*, 東大出版会

Makino, Seiichi 1983 “Speaker/Listener-Orientation and Formality Marking in Japanese” 言語研究 No. 84

Harada, Shinichi 1976 “Honorifics” in *Syntax and Semantics 5, Japanese Generative Grammar*, ed. by Shibatani, New York, Academic Press

Prideaux, Gary D. 1970 *The Syntax of Japanese Honorifics*, Mouton

Martin, Samuel E. 1964 “Speech levels in Japan and Korea” in *Language in Culture and Society*, Harper & Row

O’Neil, P.G. 1966 *Respect Language in Modern Japanese*, University of London

Brown, R.W. and Gilman, A. 1968 “The pronouns of power and solidarity,” in *Readings in the Sociology of Language*, ed. by Fishman, Mouton

資料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭語「お」「ご」や、接尾語「さん」等は、見出し語として取り上げている。ただし、「おかあさん」等は、そのまま見出し語に立てている。
 - 2.—2. 数詞は助数詞と切り離して見出し語に立てている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。
 - 2.—4. 形容動詞は、「____な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—5. 「です」に前接する「ん」「なん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—6. 「かしこまりました」等、慣用表現として扱ったものは、見出し語にしている。
 - 2.—7. 助動詞「た」や接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。ただし、助詞「たら」は、動詞部分から切り離し、見出し語に立てている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 「お」は、意味・用法により下位分類した。
 - 3.—2. 動詞のうち「いらっしゃる」等は意味・用法等により下位分類し、また動詞は、本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は「ます」形であるか、「——て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してある。

また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。

- 3.—3. 「すみません」「ちょっと」等は、その意味・用法により下位分類してある。
- 3.—4. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」に「ん」「なん」が前接するかどうかにより下位分類してある。
- 3.—5. 助詞「か」「が」「に」「ね」「の」等は、その意味・用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ません」「ました」「ましょう」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

あ(4)

- ② あ、えみこ。
③③ あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。
③⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。
⑧⑦ あ、ちょっと。

ああ(4)

- ④⑩ ああ、すみません。
⑤⑩ ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。
⑤② ああ、そうですか。
⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

あげる〔上げる〕(1)

- ⑨⑤ じゃあ、かってあげるわ。

あした(1)

- ④⑥ ところで、あしたのやすみは？

あそぶ〔遊ぶ〕(1)

- ④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいうしよにきませんか。

あっ(3)

- ⑦① あっ、そのおにもつ、おもちしましょう。
②⑧ あっ、おがわせんせい。
⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。

あの(1)

- ⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

あら(1)

- ⑥③ あら、こんなじかんだわ。

ありがとう(5)

⑤ きよしさん、おむかえ**ありがとう**。

③⑨ **ありがとう**。

⑤⑥ **ありがとうございました**。

⑨⑥ わあ、**ありがとう**。

⑩⑦ **ありがとうございます**。

ある(3)

(1)⑬ おかあさん、ちょっと、だいがくによろじが**あります**ので、しつれい
いたします。

⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとす
ぐひだりに**あります**。

(2)⑩ おかあさん、おつかれじゃ**ありません**か。

あんない〔案内〕(1)

⑤① それで、どこかへ**あんない**しようとおもいますので――。

いい(1)

⑤③ ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょ
うか。

いいえ(2)

⑪, ④① いいえ。

いう〔言う〕(1)

②⑤ おがわくんがきたら、まつように**いってください**。

いえ(1)

⑥ いえ。

いく〔行く〕(6)

(1)⑤⑨ そろそろ**いき**ましょうか。

⑦⑨ ごごは、どこへ**いき**ましょうか。

(2)②④ ちょっと、としかんへ**いってきます**。

⑩③ むこうへ**いってみ**ましょうよ。

(3)⑤③ ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょ

うか。

- (4)④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

いくら〔幾ら〕(1)

- ⑨⑨ おいくらですか。

いそがしい〔忙しい〕(1)

- ①⑨ まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。

いたす〔致す〕(4)

- (1)①⑧ おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれいいたします。

- (2)④⑤ よろしくおねがいます。

- ⑦⑧ すぐおもちいたします。

- (3)⑧⑧ おまたせいたしました。

いただく〔頂く〕(3)

- ⑦③ ゆどうふをいただきます。

- ⑧⑥ はい、いただきます。

- ⑩⑩ いちまんえんいただきます。

いただける〔頂ける〕(2)

- (1)④③ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

- (2)⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。

いちまん〔一万〕(1)

- ⑩⑩ いちまんえんいただきます。

いっしょに〔一緒に〕(1)

- ④⑤ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

いま〔今〕(2)

- ②⑨ いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

③7 いま、いらっしゃいます。

いらっしゃいませ(1)

⑧9 いらっしゃいませ。

いらっしゃる(6)

(1)④ よくいらっしゃいました。

③7 いま、いらっしゃいます。

⑤① ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。

(2)②⑨ いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

(3)②⑦ はやしせんせいは、いらっしゃいますか。

③③ あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。

うかがう〔伺う〕(1)

⑤③ ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょ
うか。

うん(2)

①⑦, ⑧② うん。

ええ(4)

①③, ⑤③, ⑥③ ええ。

①⑤ ええ、とてもげんきよ。

えみこ〔恵美子〕(2)

② あ、えみこ。

①② きよしさんも、えみこもげんきそうね。

えん〔円〕(1)

⑩⑩ いちまんえんいただきます。

お(21)

(1)⑤ きよしさん、おむかえありがとうございます。

⑦ あっ、そのおにもつ、おもちしましょう。

①⑥ はやしせんせいとのおやくそくは？

⑤⑦ けっこうなおにわね。

- ⑥1 おかあさん、おひるにしましょうか。
- ⑥6 ははは、おとうふがすきよ。
- ⑥7 おとうふがおすきなんですか。
- ⑦6 あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。
- (2)⑩ おかあさん、おつかれじゃありませんか。
- ⑧5 あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。
- (3)⑨0 すぐおかえりになります。
- ⑧1 こちらでおまちになるようにおっしゃいました。
- (4)⑦ あっ、そのおにもつ、おもちしましょう。
- ⑨6 ……はい、おねがいます。
- ④3 このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。
- (5)④5 よろしくおねがいます。
- ⑦8 すぐおもちいたします。
- ⑧3 おまたせいたしました。
- (6)①9 まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。
- ⑥7 おとうふがおすきなんですか。
- ⑨9 おいくらですか。

おかあさん〔お母さん〕(5)

- ① おかあさん。
- ⑩ おかあさん、おつかれじゃありませんか。
- ①8 おかあさん、ちょっと、だいがくようじがありますので、しつれいいたします。
- ⑤0 ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。
- ⑥1 おかあさん、おひるにしましょうか。

おがわ〔小川〕(3)

- ②5 おがわくんがきたら、まつようにいってください。
- ②8 あっ、おがわせんせい。

㉔ あ、はやしせんせい、**おがわ**せんせいがこられて、おまちです。

おっしゃる(1)

㉕ こちらでおまちになるように**おっしゃ**いました。

おとうさん〔お父さん〕(1)

㉖ **おとうさん**はげんき？

おもう〔思う〕(1)

㉗ それで、どこかへあんないしようと**おも**いますので――。

おる(2)

㉘ ごぶさたして**おり**ます。

㉙ とうきょうからかないのははがきて**おり**まして――。

か(2)

(1)㉚ おかあさん、おつかれじゃありませんか。

㉛ はやしせんせいは、いらっしゃいますか。

㉜ あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。

㉝ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

㉞ ちょっとかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

㉟ おとうふがおすきなんですか。

㊱ なにになさいますか。

㊲ なにをめしあがりますか。

㊳ おいくらですか。

(2)㊴, ㊵, ㊶, ㊷ そうですか。

㊸ ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。

㊹ ああ、そうですか。

(3)㊺ そろそろいきましょうか。

㊻ おかあさん、おひるにしましょうか。

㊼ なににしましょうか。

⑦⑨ ごごは、どこへいきましようか。

(4)④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。

が(11)

(1)①⑨ おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれいいたします。

②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。

③⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

④⑨ とうきょうからかないのははがきておりまして――。

⑤⑩ ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。

(2)⑥⑥ ははは、おとうふがすきよ。

⑥⑦ おとうふがおすきなんですか。

⑨④ わたしも、こんなのがほしいわ。

(3)④③ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

⑤⑨ ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

かう〔買う〕(1)

⑨⑤ じゃあ、かってあげるわ。

かえる〔帰る〕(1)

⑩⑩ すぐおかえりになります。

がくせい〔学生〕(1)

④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

かしこまりした(3)

⑦⑦, ⑨①, ⑨③ はい、かしこまりました。

かない〔家内〕(1)

④⑨ とうきょうからかないのははがきておりまして——。

から(1)

④⑨ とうきょうからかないのははがきておりまして——。

きよし〔清〕(2)

⑤ きよしさん、おむかえありがとうございます。

⑫ きよしさんも、えみこもげんきそうね。

きよみずでら〔清水寺〕(1)

⑧① きよみずでらはどう？

ください〔下さい〕(5)

(1)⑦⑤ ゆどうふをみつつください。

(2)②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。

⑨⑥ これとそれをみせてください。

⑨⑦ これをべつべつに、つつんでください。

(3)⑨② どうぞ、ごらんください。

くる〔来る〕(5)

(1)④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

(2)④⑨ とうきょうからかないのははがきておりまして——。

(3)②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。

(4)③⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

(5)②④ ちょっと、としょかんへいきます。

くん〔君〕(1)

②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。

けっこうな〔結構な〕(1)

⑤⑦ けっこうなおにわね。

げんきな〔元気な〕(3)

⑫ きよしさんも、えみこもげんきそうね。

⑭ おとうさんはげんき？

⑮ ええ、とてもげんきよ。

ご(1)

⑧④ どうぞ、ごゆっくり。

ごご〔午後〕(1)

⑦⑨ ごごは、どこへいきましょうか。

ございました(1)

⑤⑥ ありがとうございます。

ございます(1)

⑩⑦ ありがとうございます。

こちら(3)

③① こちらでおまちになるようにおっしゃいました。

④② どうぞこちらへ。

⑥⑨ どうぞ、こちらのほうへ。

このあいだ(1)

④③ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

ごぶさた(1)

③ ごぶさたしております。

ごらん〔御覧〕(2)

④③ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

⑨② どうぞ、ごらんください。

これ(3)

②② これ、たのむよ。

⑨⑩ これとそれを見せてください。

⑨⑦ これをべつべつに、つつんでください。

こんな(2)

⑥⑧ あら、こんなじかんだわ。

⑨④ わたしも、こんなのがほしいわ。

さあ(1)

⑧⑤ さあ、どうぞ。

さん(2)

⑤ きよしさん、おむかえありがとうございます。

⑫ きよしさんも、えみこもげんきそうね。

じかん〔時間〕(1)

⑥③ あら、こんなじかんだわ。

しつれい〔失礼〕(1)

⑬ おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれいいたします。

じゃ(1)

⑩ おかあさん、おつかれじゃありませんか。

じゃあ(2)

⑦④ じゃあ、わたしも。

⑨⑤ じゃあ、かってあげるわ。

すきな〔好きな〕(2)

⑥⑥ ははは、おとうふがすきよ。

⑥⑦ おとうふがおすきなんですか。

すぐ(3)

⑩⑧ すぐおかえりになります。

⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

⑦⑧ すぐおもちいたします。

すてきな(1)

⑨③ すてきね。

すみません(4)

(1)⑨ すみません。

①⑨ まあ、おれそがしいのに、すみませんでしたねえ。

④⑩ ああ、すみません。

(2)③⑧ すみません。

する(7)

(1)⑦ あっ、そのおにもつ、おもちしましょう。

③⑥ ……はい、おねがいします。

(2)⑥① おかあさん、おひるにしましょうか。

(3)③ ごぶさたしております。

(4)④③ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

(5)⑤① それで、どこかへあんないしようとおもいますので——。

⑥④ なににしようか。

ゼミ(1)

④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

せる(2)

(1)③⑨ おまたせいたしました。

(2)④④ はい、よませてもらいましょう。

せんせい〔先生〕(7)

①⑥ はやしせんせいとおのやくそくは？

②⑦ はやしせんせいは、いらっしゃいますか。

③⑧ あっ、おがわせんせい。

④⑨ いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

⑤③ あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。

⑥⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

⑦⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

そう(9)

(1)⑧, ③②, ③⑧, ⑤⑤ そうですか。

⑤② ああ, そうですか。

(2)⑥②, ⑦② そうですね。

⑥⑤, ⑧① そうね。

そう(1)

①② きよしさんも, えみこもげんきそうね。

そちら(1)

③③ あ, そちらに, はやしせんせい, いらっしゃいますか。

その(1)

⑦ あっ, そのおにもつ, おもちしましょう。

それ(1)

⑨① これとそれをみせてください。

それで(1)

⑤① それで, どこかへあんないしようとおもいますので——。

そろそろ(1)

⑤⑨ そろそろいきましようか。

だ(1)

⑥③ あら, こんなじかんだわ。

だいがく〔大学〕(1)

①⑧ おかあさん, ちょっと, だいがくにようじがありますので, しつれい
いたします。

たのむ〔頼む〕(1)

②② これ, たのむよ。

たら(4)

(1)②⑤ おがわくんがきたら, まつようにいってください。

⑤③ ちょっとうかがいますが, ほうりんじへはどういったらいいのでしょ
うか。

(2)④⑨ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったですにきませんか。

(3)⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

ちゃ〔茶〕(1)

⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。

ちょっと(4)

(1)⑩ おかあさん、ちょっと、だいがくによろじがありますので、しつれいいたします。

②④ ちょっと、としょかんへいってきます。

(2)⑤③ ちょっといかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

⑧⑦ あ、ちょっと。

つかれる〔疲れる〕(1)

⑩ おかあさん、おつかれじゃありませんか。

つつむ〔包む〕(1)

⑨⑦ これをべつべつに、つつんでください。

つめたい〔冷たい〕(1)

⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。

で(1)

③① こちらでおまちになるようにおっしゃいました。

でした(1)

⑩ まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。

でしょう(1)

⑤③ ちょっといかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

です(14)

(1)⑧⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

(2)⑧, ③②, ③⑧, ⑤⑤　そうですか。

⑤②　ああ、そうですか。

③⑨　おいくらですか。

(3)③②, ⑦②　そうですね。

(4)④③　このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

(5)⑤④　ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

(6)④⑧　ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

⑤⑩　ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。

⑥⑦　おとうふがおすきなんですか。

では(1)

②⑩　では、のちほど。

と(5)

(1)①⑩　これとそれを見せてください。

(2)①⑥　はやしせんせいとおやくそくは？

④⑧　ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

(3)⑤①　それで、どこかへあんないしようとおもいますので――。

(4)⑤④　ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

どう(2)

⑤③　ちよっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

⑥①　きよみずではどう？

とうきょう〔東京〕(1)

④⑨　とうきょうからかないのははがきておりまして――。

どうぞ(5)

- ④② どうぞこちらへ。
- ⑥⑨ どうぞ、こちらのほうへ。
- ⑧④ どうぞ、ごゆっくり。
- ⑧⑤ さあ、どうぞ。
- ⑨② どうぞ、ごらんください。

とうふ〔豆腐〕(2)

- ⑥⑥ ははは、おとうふがすきよ。
- ⑥⑦ おとうふがおすきなんですか。

どこ(1)

- ⑦⑨ ごごは、どこへいきましょうか。

どこか(1)

- ⑤① それで、どこかへあんないしようとおもいますので――。

ところで(1)

- ④⑥ ところで、あしたのやすみは？

としょかん〔図書館〕(2)

- ②④ ちょっと、としょかんへいってきます。
- ②⑨ いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

とても(1)

- ①⑤ ええ、とてもげんきよ。

なさる(1)

- ⑦⑩ なにになさいますか。

なに〔何〕(3)

- ⑥④ なににしようか。
- ⑦⑩ なにになさいますか。
- ⑦① なにをめしあがりますか。

なにか〔何か〕(1)

- ④⑦ なにか。

なら〔奈良〕(1)

- ④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

なる(2)

- (1)⑩ すぐおかえりになります。
(2)⑪ こちらでおまちになるようにおっしゃいました。

なん(1)

- ⑥⑦ おとうふがすすきなんですか。

に(10)

- (1)⑬ おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれいいたします。
③③ あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。
⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。
(2)⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。
(3)④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。
(4)⑥① おかあさん、おひるにしましょうか。
⑥④ なににしようか。
⑦⑦ なにになさいますか。
(5)⑩⑨ すぐおかえりになります。
⑧① こちらでおまちになるようにおっしゃいました。

にもつ〔荷物〕(1)

- ⑦ あっ、そのおにもつ、おもちしましょう。

にわ〔庭〕(1)

- ⑤⑦ けっこうなおにわね。

ね(7)

(1)⑫ きよしさんも、えみこもげんきそうね。

⑤7 けっこうなおにわね。

⑨3 すてきね。

(2)⑥2, ⑦2 そうですね。

⑥5, ⑧0 そうね。

ねえ(1)

①9 まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。

ねがう〔願う〕(2)

③6 ……はい、おねがいします。

④5 よろしくおねがいたします。

ねっ(1)

⑩4 ねっ。

の(8)

(1)④3 このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

④6 ところで、あしたのやすみは？

④8 ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

④9 とうきょうからかないのははがきておりまして——。

⑥9 どうぞ、こちらのほうへ。

(2)①6 はやしせんせいとのおやくそくは？

(3)⑨4 わたしも、こんなのがほしいわ。

(4)⑤2 ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

のちほど〔後ほど〕(1)

②0 では、のちほど。

ので(2)

①8 おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれい

いたします。

⑤1 それで、どこかへあんないしようとおもいますので――。

のに(1)

①9 まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。

は(9)

(1)④ おとうさんはげんき？

②7 はやしせんせい**は**、いらっしゃいますか。

②9 いま、はやしせんせい**は**、としょかんへいらっしゃいました。

⑤3 ちょっとうかがいますが、ほうりんじへ**は**どういったらいいの
うか。

⑥6 **ははは**、おとうふがすきよ。

⑦9 ごご**は**、どこへいきましようか。

⑧1 きよみずでら**は**どう？

(2)⑩ はやしせんせいとおやくそく**は**？

④6 ところで、あしたのやすみ**は**？

はい(12)

②1, ②3, ⑥0, ⑩1 **はい**。

②6 **はい**、わかりました。

③4 ……**はい**。

③6 ……**はい**、おねがいします。

④4 **はい**、よませてもらいましょう。

⑦7, ⑨1, ⑨8 **はい**、かしこまりました。

⑧6 **はい**、いただきます。

はし〔橋〕(1)

⑤4 ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとす
ぐひだりにあります。

はなす〔話す〕(1)

④3 このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけ

ますか。

はは〔母〕(2)

④⑨　とうきょうからかないのははがきておりまして——。

⑥⑥　ははは、おとうふがすきよ。

はやし〔林〕(5)

①⑥　はやしせんせいとおのおやくそくは？

②⑦　はやしせんせいは、いらっしゃいますか。

②⑨　いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

③③　あ、そちらに、はやしせんせい、いらっしゃいますか。

③⑤　あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

ひだり〔左〕(1)

⑤④　ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

ひる〔昼〕(1)

⑥①　おかあさん、おひるにしましょうか。

へ(9)

②④　ちょっと、としょかんへ行ってきます。

②⑨　いま、はやしせんせいは、としょかんへいらっしゃいました。

④②　どうぞこちらへ。

④⑧　ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

⑤①　それで、どこかへあんないしようとおもいますので——。

⑤③　ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

⑥⑨　どうぞ、こちらのほうへ。

⑦⑨　ごごは、どこへいきましょうか。

⑩③　むこうへいてみましようよ。

べつべつに〔別々に〕(1)

⑨⑦ これをべつべつに、つつんでください。

ほう〔方〕(1)

⑥⑨ どうぞ、こちらのほうへ。

ほうりんじ〔法輪寺〕(2)

⑤③ ちょっとかがありますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。

⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

ほしい〔欲しい〕(1)

⑨④ わたしも、こんなのがほしいわ。

まあ(1)

①⑨ まあ、おいそがしいのに、すみませんでしたねえ。

まがる〔曲がる〕(1)

⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

ました(5)

④, ②⑥, ②⑨, ③①, ⑧③

ましょう(6)

⑦, ④④, ⑤⑨, ⑥①, ⑦⑨, ⑩③

ます(20)

③, ①⑧, ①⑧, ②④, ②⑦, ③⑩, ③③, ③⑥, ③⑦, ④③, ④⑤, ⑤①, ⑤③, ⑤④, ⑦⑩, ⑦①, ⑦③
⑦⑧, ⑧⑥, ⑩⑩

まして(1)

④⑨ とうきょうからかないのははがきておりまして——。

ません(3)

①⑩, ④⑧, ⑦⑥

まつ〔待つ〕(4)

(1)②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。

(2)⑧1 こちらで**おまち**になるようにおっしゃいました。

③⑤ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、**おまち**です。

(3)⑧③ **おまた**せいたしました。

みぎ〔右〕(1)

⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、**みぎ**にまがるとすぐひだりにあります。

みせる〔見せる〕(1)

⑨⑩ これとそれを**みせて**ください。

みつつ〔三つ〕(1)

⑦⑤ ゆどうふを**みつつ**ください。

みる(1)

⑩③ むこうへ行って**み**ましょうよ。

むかえ〔迎え〕(1)

⑤ きよしさん、お**むかえ**ありがとう。

むこう〔向こう〕(1)

⑩③ むこうへ行って**み**ましょうよ。

めしあがる〔召し上がる〕(1)

⑦① なにを**めしあが**りますか。

も(4)

⑫② きよしさん**も**、えみこ**も**げんきそうね。

⑫② きよしさん**も**、えみこ**も**げんきそうね。

⑦④ じゃあ、わたし**も**。

⑨④ わたし**も**、こんなのがほしいわ。

もつ〔持つ〕(2)

⑦ あっ、そのおにもつ、お**もち**しましょう。

⑦⑧ すぐお**もち**いたします。

もらう(1)

④④ はい、よませて**もら**いましょう。

やくそく〔約束〕(1)

- ⑩ はやしせんせいとおやくそくは？

やすみ〔休み〕(1)

- ④⑥ ところで、あしたのやすみは？

ゆっくり(1)

- ③④ どうぞ、ごゆっくり。

ゆどうふ〔湯豆腐〕(2)

- ⑦⑧ ゆどうふをいただきます。
⑦⑤ ゆどうふをみつつください。

よ(4)

- ①⑤ ええ、とてもげんきよ。
②② これ、たのむよ。
⑥⑥ ははは、おとうふがすきよ。
⑩③ むこうへいってみましょうよ。

よい〔良い〕(1)

- ④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。

よう(2)

- ⑤① それで、どこかへあんないしようとおもいますので――。
⑥④ なににしようか。

ようじ〔用事〕(1)

- ①⑧ おかあさん、ちょっと、だいがくにようじがありますので、しつれいいたします。

ように(2)

- ②⑤ おがわくんがきたら、まつようにいってください。
③① こちらでおまちになるようにおっしゃいました。

よく(1)

- ④ よくいらっしやいました。

よむ〔読む〕(1)

- ④④ はい、よませてもらいましょう。

よろしく(1)

- ④⑤ よろしくおねがいたします。

られる(1)

- ④⑥ あ、はやしせんせい、おがわせんせいがこられて、おまちです。

ろんぶん〔論文〕(1)

- ④⑧ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。

わ(3)

- ④⑨ あら、こんなじかんだわ。
④⑩ わたしも、こんなのがほしいわ。
④⑪ じゃあ、かってあげるわ。

わあ(1)

- ④⑫ わあ、ありがとう。

わかる〔分かる〕(1)

- ④⑬ はい、わかりました。

わたし〔私〕(3)

- ④⑭ このあいだ、おはなししたわたしのろんぶんですが、ごらんいただけますか。
④⑮ じゃあ、わたしも。
④⑯ わたしも、こんなのがほしいわ。

わたる〔渡る〕(1)

- ④⑰ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

を(7)

- (1)④⑱ なにをめしあがりますか。
④⑲ ゆどうふをいただきます。

- ⑦⑤ ゆどうふをみつつください。
- ⑦⑥ あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。
- ⑦⑩ これとそれを見せてください。
- ⑦⑦ これをべつべつに、つつんでください。
- (2)⑤④ ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。

ん(2)

- ④⑧ ゼミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったらいっしょにきませんか。
- ⑤⑩ ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画

「よく いらっしゃいました」

——待遇表現 1——

企 画 国立国語研究所

制 作 日本シネセル株式会社

フィルム 16m/m E Kカラー・スタンダード

巻 数 全1巻

上映時間 5分

現 像 所 東映化学

録 音 読売スタジオ

完 成 昭和58年8月15日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一

制作担当 佐 藤 吉 彦

脚 本 前 田 直 明

演 出 前 田 直 明

演出助手 野 澤 和 之

撮 影 相 良 国 康

撮影助手 篠 沼 哲 夫

照 明 伴 野 功

照明助手 西 田 博 中 安 和 則

スクリプト 成 田 由起子

録 音 小 川 正 城 (読売スタジオ)

ネガ編集 斎 藤 康 一

配 役 小川 清 御 友 公 喜

小川恵美子 正 木 香 子

恵美子の母 五十嵐 美恵子

林 教 授 西 本 裕 行

大学院生 江 川 泰 子

湯どうふ屋の店員 前田佳子

(同上声 土 井 美 加)

清水焼屋の店員 荒木よう子

旅 行 者 久 松 美津枝

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」 テーマ・タイトル 「よく いらっしゃいました」 ——待遇表現 1——	
2	京都 夜明けの京都全景	
3	〃	
4	〃	
5	〃	
6	〃	
7	〃	
8	〃	
9	〃	
10	〃	
11	京都駅 新幹線のプラットフォームで待 つ清・恵美子	
12	新幹線到着	
13	母を迎える清・恵美子	えみこ「①おかあさん。」 はは「②あ、えみこ。」 きよし「③ごぶさたしており ます。 ④よくいらっしゃいまし た。」 はは「⑤きよしさん、おむか えありがとう。」 きよし「⑥いえ。」 きよし「⑦あっ、そのおにも つ、おもちましょ。」 はは「⑧そうですか。 ⑨すみません。」
14	母・清・恵美子、歩きはじめ	きよし「⑩おかあさん、おつ

	る	かれじゃありませんか。」
		はは「⑪いいえ。
		⑫きよしさんも、えみこも
		げんきそうね。」
		えみこ「⑬ええ。
		⑭おとうさんはげんき？」
		はは「⑮ええ、とてもげんき
		よ。」
15	京都駅前のタクシー乗り場で	えみこ「⑯はやしせんせいと
	待つ三人	のおやくそくは？」
16	清の顔	きよし「⑰うん。
		⑱おかあさん、ちょっと、
		だいがくにようじがあります
		ので、しつれいします。」
17	清肩越し、母顔	はは「⑲まあ、おいそがしい
		のに、すみませんでしたね
		え。」
		きよし「⑳では、のちほど。」
18	三人	はは「㉑はい。」
	清、タクシーに乗る	きよし「㉒これ、たのむよ。」
		えみこ「㉓はい。」
19	大学の研究室	はやし「㉔ちょっと、としよ
	研究室内	かんへいってきます。
	林、大学院生との会話後、研	㉕おがわくんがきたら、ま
	究室を出る	つようにいってください。」
		いんせい「㉖はい、わかりま
		した。」
20	清、研究室に入る	きよし「㉗はやしせんせい
	大学院生手前	は、いらっしゃいますか。」
21	清肩越し、大学院生	いんせい「㉘あつ、おがわせ
		んせい。
		㉙いま、はやしせんせい
		は、としよかんへいらっし
		やいました。

		③⑩すぐおかえりになります。 す。
22	ソファーに座る清	③⑪こちらでおまちになるよう におっしゃいました。」
23	電話する大学院生	きよし「③⑫そうですか。」 いんせい「③⑬あつ、そちらに、 はやしせんせい、いらっし やいますか。 ③⑭……はい。」 いんせい「③⑮あつ、はやしせ、 んせい、おがわせんせいが こられて、おまちです。 ③⑯……はい、おねがいしま す。 ③⑰いま、いらっしやいま す。」
24	ソファーに座る大学院生	きよし「③⑱そうですか。 ③⑲ありがとう。」
25	林、ドアから入ってくる	はやし「④⑩ああ、すみませ ん。」
	奥に入る林と清	きよし「④⑪いいえ。」 はやし「④⑫どうぞ、こちら へ。」
26	椅子に座る清	きよし「④⑬このあいだ、おは なししたわたしのろんぶん ですが、ごらんいただけま すか。」
27	林・清	はやし「④⑭はい、よませても らいましょう。」 きよし「④⑮よろしくおねがい いたします。」 はやし「④⑯ところで、あした のやすみは？」 きよし「④⑰なにか。」

		はやし「④⑧ぜミのがくせいとならへあそびにいくんですが、よかったら、いっしょにきませんか。」
28	清の顔	きよし「④⑨とうきょうからかないのははがきておりまして——。」
29	林・清	はやし「⑤⑩ああ、おかあさんがいらっしゃったんですか。」
		きよし「⑤⑪それで、どこかへあんないしようとおもいますので——。」
		はやし「⑤⑫ああ、そうですか。」
30	嵐山 歩く清・恵美子・母	
31	清肩越し、旅行者	りょこうしゃ「⑤⑬ちょっとうかがいますが、ほうりんじへはどういったらいいのでしょうか。」
32	旅行者肩越し、清	きよし「⑤⑭ああ、ほうりんじでしたら、あのはしをわたって、みぎにまがるとすぐひだりにあります。」
33	立ち去る旅行者	りょこうしゃ「⑤⑮そうですか。 ⑤⑯ありがとうございます。」
34	川	
35	南禅寺境内 枯山水の庭 それをみる母・ 恵美子・清	
36	母	はは「⑤⑰けっこうなおにわ

37	三人	ね。」 えみこ「⑤⑧ええ。」 きよし「⑤⑨そろそろいきましようか。」 はは「⑥⑩はい。」
38	歩く三人 山門前、歩く三人	きよし「⑥⑪おかあさん、おひるにしましょうか。」 はは「⑥⑫そうですね。」 えみこ「⑥⑬あら、こんなじかんだわ。」 きよし「⑥⑭なににしょうか。」 えみこ「⑥⑮そうね。」 ⑥⑯ははは、おとうふがすきよ。」 きよし「⑥⑰おとうふがおすきなんですか。」 はは「⑥⑱ええ。」
39	湯どうふ屋 門に入る母・恵美子・清	
40	中庭を歩く三人と店員	てんいん「⑥⑲どうぞ、こちらのほうへ。」
41	台に座る三人	⑦⑰なにになさいますか。」 きよし「⑦⑱なにをめしあがりますか。」
42	店員	はは「⑦⑲そうですね。」 ⑦⑳ゆどうふをいただきます。」
43	座っている三人	えみこ「⑦㉑じゃあ、わたしも。」 きよし「⑦㉒ゆどうふをみってください。」 えみこ「⑦㉓あっ、つめたいおちゃをいただけませんか。」

44	母肩越し、店員	てんいん「⑦⑦はい、かしこまりました。」
45	母と恵美子	⑦⑧すぐおもちいたします。」 えみこ「⑦⑨ごごは、どこへいきましようか。」 はは「⑦⑩そうね。 ⑦⑪きよみずでらは、どう？」 えみこ「⑦⑫うん。」 てんいん「⑦⑬おまたせいたしました。」 ⑦⑭どうぞ、ごゆっくり。」 きよし「⑦⑮さあ、どうぞ。」 はは「⑦⑯はい、いただきます。」 はは「⑦⑰あつ、ちょっと。 ⑦⑱すみません。」 てんいん「⑦⑲いらっしゃいませ。」 はは「⑦⑳これとそれを見せてください。」 てんいん「⑦㉑はい、かしこまりました。」 てんいん「⑦㉒どうぞ、ごらんください。」 えみこ「⑦㉓すてきね。 ⑦㉔わたしも、こんなのが好きいわ。」 はは「⑦㉕じゃあ、かってあげるわ。」 えみこ「⑦㉖わあ、ありがとう。」 はは「⑦㉗これをべつべつに、つつんでください。」
46	配膳する店員	
47	食べる三人	
48	清水寺	
49	三年坂を登る母・恵美子・清水焼屋の店員を呼ぶ母 店員がやってくる	
50	店員と母 店員、湯のみを出して台の上へのせる	
51	三人	

52	店員	てんいん「㊟はい、かしこまりました。」
53	お金を払う母	はは「㊟おいくらですか。」 てんいん「㊟いちまんえんいただきます。」 はは「㊟はい。」 てんいん「㊟ありがとうございます。」
54	清水寺を歩く三人	えみこ「㊟むこうへいってみましょうよ。」 ㊟ねっ。」
55	〃	
56	新緑の清水寺	
57	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社	